多世界解釈的な「量子都市ガバナンス」
――インド後期密教に関わりつながる考究からの示唆を織り込んで――

谷　村　光　浩

■もくじ

1. はじめに
2. 現代物理学の先端にて提示された宇宙や“新科学”のとらえ方から
3. 宗教(性)の解明や仏教思想の更新 / 再構築の試みから
4. 空海密教の“つくり方”，今日的な“生かし方”から
5. インド後期密教が行き着いた“無上”とする新境地をめぐって
6. さらに考え進める〈多世界解釈的な「量子都市ガバナンス」〉の記述

1. はじめに

『量子力学の 100 年』を通観する物理学界の重鎮・佐藤文隆(2024)は，2025 年「国際量子科学技術年(International Year of Quantum Science and Technology)」の名称が「量子力学や量子物理学でない」ことに「注意すべき」(7)とし，さらには「次世代の教育」にまで言及されていることに，その際立つ「進歩」(8)が見て取れるという。また，「IYQ2025 のロゴマーク」が「定番の“ネコ”」［認識論の象徴］でなく「量子“もつれ”」［量子技術の象徴］の図案であることにも着目し，その「不思議」を操る「量子コンピュータや量子暗号といった.....技術の時代が始まろうとしている」(9–10)現今の情勢をとらえたものと説く。

量子力学を「量子物理学」と「量子“情報理論”」との「二重構造」とする見立てが「現在の研究界での平均的な態度ではないか」と推しはかる著者は，その「左翼にはエネルギーも時空も全て量子情報だという過激派があり，右翼には依然として“二重構造”を拒否して状態ベクトルを外界のものだとする“多世界解釈”などの.....量子力学における実在論がある」(74)と絵解きしてみせる。なお，昨今「データサイエンス」が勢いづくなか，「コペンハーゲン解釈」にあっては，その「波動関数で記述される量子情報の確率」を「ベイズ統計の確率」に見立て直す「QBism［キュービズム］」(188)なる新提案とあわせて説き示されている。

ブルーバックスで『量子力学の多世界解釈』を手解きする和田純夫(2022)は，この「量子ベイズ主義(quantum Bayesianism)」とは「コペンハーゲン解釈の修正版」(7)で，一般には「現代版コペンハーゲン解釈」とも呼びならわされているが，それは「物理ではなくむしろ数学の話といえる」(252)と説き分ける。この「新しい発想」につき，著者は「［実在を重視せず，人間が得られた情報を問題の中心に置く］量子情報理論という分野の登場と関係している」と付言し，それなら「物理学とは何か実在のものに対する学問ではなく，情報に関する学問ということになる」(256)と強調する。何よりも「Q ビズム支持者にとっては納得のいくものではないだろう」けれども，「Q ビズムという解釈は多世界解釈によって解釈できる」(257)とも論じ詰

める。

この論文に近接した方面においては，これまでに小考を重ねてきた新造語の「量子都市ガバナンス」(Quantum Urban Governance)につながる標題を掲げた学術書が刊行されている。2010年にノーベル経済学賞を受賞した経済学者クリストファー・ピサリデスの協力を得て，ホワイトシールド[グローバル公共政策・戦略顧問会社]のファディ・ファラ(Farra 2023)は，公共政策の根底の思考回路を刷新するとして，*Quantum Governance*（クァンタム・ガバナンス）を提起している。

社会の発展パラダイムでは「デジタル時代」にいたったにもかかわらず，公共政策の基本的な考え方は「経済・社会的な政策分野」や「地域・部門・階層」を分析の主要単位とする段階に留まっていると見て取る著者は，「最適な公共政策パラダイム」を築けていないという(25–26)。そして，ニュートン式の機械論的な視線ではなく，量子力学における粒子とそのエンタングルメントにならい，個人と個人のネットワークを分析の主要単位とする，一段進んだ「市民中心のガバナンス」が求められると論じ，それを「クァンタム・ガバナンス」と称している(25–26, 34, 41)。また，「クァンタム・ガバナンス」とは，個人が計量の単位となるボトム・アップのシステムともいう(42)。

かえりて，筆者自身が連ねてきた研究は，旧来の“ニュートニアン・パラダイム”に留まる都市ガバナンスを深化させるにあたり，量子力学の“標準的”な読み解き方ではあるが「古典物理学とのつぎはぎ」(町田 1994, 147)とされる「コペンハーゲン解釈」にこもらず,「多世界解釈」からの類推より，都市ガバナンスのありようを考え進める試みである。量子力学・科学技術をめぐる昨今の動きにてらせば，前述の“量子エコシステム”にて敏腕を振るう“利用専門家”を含め，政策分析・研究者, ルポライター等が“これぞ”と持ち出す状態はもとより, “些細なこと”と看過した/“見て見ぬ振り”をした/ときに“消去”さえした，その他の状態とも「量子的な重ね合わせ，もつれ合い」でとらえる—むろん，現実には，あらゆる局面を汲み尽くし，論じきれるわけではないが，いわゆる「収縮」を一切考えない—ところが要点である。

これまでにも，小論を取りまとめるたびに重ねて記してきたが，筆者は，国際連合大学(UNU)学長室等での研究プロジェクトを通じて，グローバル化の進展とともに顕在化してきた「人の“居住”状態に見受けられるパラレル性」に対応し得るガバナンス論として，量子力学における「多世界解釈」をベースにした「量子都市ガバナンス」(Quantum Urban Governance)という新たな思考を提起した(Tanimura 2005, 66–67; 2006, 276, 295)。その後，この新造語の「量子」部分につき,「物理学からの類推より“考えられるガバナンス”の記述」(谷村 2009)では,「多世界解釈」にならい,「多“居住”解釈」を提起した。次いで,「移動する人々をめぐる論考からの類推より考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」(谷村 2012)では, その提案を「多“居住”/多アイデンティティ解釈」へと拡げた。事例研究として，明清中国の「徽州商人のくらしが考究される視座，そして“考えられるガバナンス”の記述」(程・谷村 2013)では，「“物理学からの類推”では想定しえなかった点」(108)を織り込むなどの補記をした。また，現代中国にあって珠江デルタの“変貌する村”の描き出され方に着目した「多世界解釈からの類推より考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」(谷村 2018)では，さらに「多居場所/多アイデンティティ/多連係/多経路解釈」を案出した。その上で，新造語の「都市」部分については,「“都市”をめぐる論考の多世界解釈的な再読を通じて練る 考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」(谷村 2020)を取りまとめ，上述の小考にさらに補筆を施した。そして，新造語の「ガバナン

ス」部分をめぐり思索した「多世界解釈的に考え進める“量子都市ガバナンス”」(谷村 2023)では，「多居場所/多アイデンティティ/多連係/多理路/多路線/多経路解釈[1]」を提起した。

一連の作業を踏まえ，この論文では，またひとつの事例研究として―筆者にとっては中国をフィールドとする諸課題探究の延長線上で，かねてより関心を抱きながらもまだ自身の機が熟さないとみて取りかかれずにいた―「インド後期密教に関わりつながる考究からの示唆を織り込んで」，さらに「多世界解釈的な“量子都市ガバナンス”」を練ってみたい。

この「インド後期密教」が到達したという状態をとらえるにあたっては，それと“しきりに”重なり合うような諸状態をあらかじめ概観しておくことが欠かせない。最初に，今日の“私たち”であればと，次のセクション「2. 現代物理学の先端にて提示された宇宙や“新科学”のとらえ方から」では，先学の高論卓説が提起する主たる視座に接しておきたい。次いで，「3. 宗教(性)の解明や仏教思想の更新/再構築の試みから」においては，「密教」なる領域に立ち入る前に，そもそもとして，近現代にあっての宗教(性)や仏教思想をめぐる諸氏の読み解きや提言にあたってみたい。さらに，「インド後期密教」にいたる前には，「中期密教」に位置づけられる「日本密教」についても，ことに「4. 空海密教の“つくり方”，今日的な“生かし方”から」として，先覚が肝要とする観点も汲み上げる。そして，いよいよ「5. インド後期密教が行き着いた“無上”とする新境地をめぐって」では，代表的な聖典が試みた「世界観の“つくり変え方”」や，とりわけ「チベット仏教・密教の“用いられ方”」につき，第一線の有識者による論究の視角をとらえる。最後に，「6. さらに考え進める〈多世界解釈的な「量子都市ガバナンス」〉の記述」では，それまでの各セクションのおわりに整理した本研究への「示唆」を改めて振り返り，先述の「多居場所/多アイデンティティ/多連係/多理路/多路線/多経路解釈」に補筆するかたちで，“ひとまず”の試論をまとめてみたい。

この論文にあっても，引き続き，これぞ新時代の着目すべき“クァンタム(都市)ガバナンス”というようなコペンハーゲン解釈流の見栄えのする提起でなく，「量子都市ガバナンス」なる新造語自体を「量子的な重ね合わせ，もつれ合い」のままに推しはかるようにつとめ，今後もその考えられる記述を，量子的な個のあり方/つながり方/歩み・進め方などをベースに“話し合い”，“書き加え”が絶えず可能なひとつの素案としてまとめてみる。

2. 現代物理学の先端にて提示された宇宙や“新科学”のとらえ方から

2-1. 現今の宇宙の説き立てられ方から

日経サイエンス編集部(2023)は，「私たちの宇宙観は時代とともに大きく変わってきた」とし，16 世紀「天動説を覆す地動説」，17 世紀「万有引力の法則」，20 世紀「ビッグバン宇宙論」を例示した上で，近年の「量子重力理論の研究」をベースに提唱された仮説「ホログラフィック宇宙」(4)を同誌別冊にて重点的に取り上げている。

ことに「2020 年代における研究の状況」を簡明に説くことに苦心する古田彩[編集部]は，「“時空の創発”ってどういうこと？」と，日本の「極限宇宙プロジェクト」に助言を与えている東京工業大学名誉教授「細谷曉夫氏に聞く」(細谷・古田 2023)。

まず「何かから時間と空間の計量的なものが得られたら，それを“時空が創発した”と呼んでいる」(82)と応じる細谷曉夫は，「時空」は「容れもののようなもの」ではなく(81)，1983 年に R. ソーキン[米国の物理学者]が見つけた「場の

量子もつれ」[真空の空間に適当な境界を引いて，その中を領域A，外側を領域Bと.....すると境界の内と外で，Aの量子場とBの量子場が量子もつれになること]によって生じる(82)点から説き起こす。そして，1997年にJ.マルダセナ[プリンストン高等研究所]が見出した「AdS/CFT対応という数学的な関係性」を用いると，「[4次元の]CFT[Conformal Field Theory: 共形場理論(量子場の理論)]平面から[5次元の]AdS[Anti-de Sitter Space: 反ド・ジッター空間(仮想的な宇宙)]空間が立ち上がり，その中にCFT平面の領域Aに対応する[4次元の]極小曲面が描ける」(83)ことを図説した後，「ある次元の中身の性質は，1次元低い表面に現れた情報によって決まる」という「ホログラフィー原理」がさらにそこへ接合され，きっと「そういうふうに自然はできているだろう，という見方」(84–85)が提示されるにいたったと解説する。

語り手自身は「本来は，おそらくAdSではない何らかの5次元時空があって，その境界面に4次元のCFTがあり，5次元時空のほうからCFTに本物の重力が投影される―そんなふうな対応になっているはず」(85)と推考する。

この別冊で「創発する時空」を概説する米国立ローレンス・バークレー研究所サイエンス・ライターのA.ベッカー(2023)は，J.マルダセナにならい，「AdS/CFT対応」を「小説を読むこと」になぞらえ，「[何かをしている]登場人物がAdSに相当し，[本の中にある]テキストがCFTだ」(75)と説き示す。そして，「空間が量子もつれでできているなら，量子重力の謎はずっと簡単に解けるように見える」(77)と述べ，「量子重力理論の構築が困難だった理由」につき，L.サスキンド[スタンフォード大学]の次のような語を引く(77)。

> 量子重力理論がうまくいかなかったのは，一般相対論と量子力学という異なる2つの描像を出発点とし，それらを1つにしようとしたからだ。実際には相対論と量子力学は密接に関連しており，別々に理論化して後から1つにしようとしても無理だ。量子力学なしの重力などありえない。

なお，「AdS/CFT対応」をめぐって，A.ベッカーは，「時空が量子系からどのように創発するかを示す例とされることが多いが，.....量子力学のほうが創発的であって，基本は時空であることを意味しているのかもしれない。あるいはどちらも基本的ではなく，より深いレベルに，さらに基本的な理論が存在する可能性もある」とのA.ネイ[カリフォルニア大学デービス校]による「別の解釈」(78)にもふれている。

いずれにしても「古代ギリシャ人が“空間とは何か”“時間とは何か”“変化とは何か”という疑問を抱き，現在の我々がいまだに同じ疑問を別の形で考え続けている。ということは，これらは正しい疑問なのだろう」(79)と，結語にはC.ヴュートリッヒ[ジュネーブ大学]の思惟をすえている。

さらに，量子力学の多世界解釈との関わりでは，日経サイエンス編集部(2018)の『量子宇宙』に，野村泰紀[カリフォルニア大学バークレー校/東京大学]が掲げるマルチバースの「新たな見方」―「無数の宇宙は，量子力学的な重ね合わせ状態になっており，それぞれが確率的に存在するという」(5)描像―が取り上げられている。

野村泰紀(2018)は，「2011年，.....マルチバース[多宇宙]とエヴェレット流の量子力学的多世界が，ある意味において同じ概念である[数学的に等価である]と提唱した」(66, 70)。そして，「私たちの宇宙は単一の実空間ではなく確率空間の中に[同時に]存在する多数の宇宙の1つであると考えられる」(66, 72)と説き示している。

古田彩は「提唱者野村泰紀博士に聞く」(野村・古田2018)なかで，「インフレーションに

よって生じる泡宇宙」につき，「ほとんどは銀河も人間も存在しない何もない宇宙で，たまたま銀河や星が生成した宇宙のどれかに私たちはいる」(80)と見て取れ，「それぞれの宇宙はその宇宙の地平の内側にいる観測者にしか観測できない」とはいえ「ある観測者の宇宙の地平の中に，複数の宇宙が入っていることはありえます」(82)といった要点を，聞き手として引き出している[(2)]。

ときに，宇宙生命探索に関わる宇宙生物学者の松尾太郎(2023)は，次代を担う青年に向けた入門書にて，「“地球生命”をものさしとして，“地球外生命”を探すのは，最初のステップとしては間違(まちが)いではない」が，「そもそも生命とは」(76–77)と読者に問う。およそ40億年とされる「地球生命の歴史の中で，“生”と“死”を選択(せんたく)する個体が生まれたのは，今から約20億年前のこと」(77)で，「そのような生命体が宇宙に存在することは非常にまれ」，かつ「地球外生命の多くは……“目に見える”生き物として存在していないのかも」(78)と明かし，「地球生命とは全く異なる方法で，生命活動の維持や生命の情報の伝達を行っているかも」(225)とほのめかす。「いつの時代も，宇宙観と生命観の交差するところに，宇宙生命探査の最前線はある」(224)と洞察する著者は，そうした作業とは「私たちをより良く知るための機会」(226)と結んでいる。

2–2. “新科学”［ニュー・サイエンス］のとらえ方から

1970年代から80年代には，「ニュー・フィジシストの若き旗頭」と称されたF.カプラ(1979)による『タオ自然学』(原題：*The Tao of Physics*)が脚光を浴びた。「二十世紀の物理学の基盤である量子論と相対性理論によって，物理学者はヒンドゥー教徒や仏教徒やタオイストと同じ世界観をもつようになった」(18)と見定める著者は，その書の扉に「科学に神秘思想はいらないし，神秘思想に科学はいらない。だが，人間には両方とも必要なのだ」との主意を掲げる。「エピローグ」では，「現代物理学の理論やモデルは，東洋の神秘思想の観点と完全に調和した内的矛盾のない世界観に通じるようである」(331)と肝所を振り返り，「科学と神秘思想は，人間の心のなかにある相補的な合理的能力と直観的能力それぞれのあらわれ」と括った上で，「われわれに必要なのは，両者の統合ではない。いまこそ，神秘的直観と科学的分析のダイナミックな相互作用が望まれている」(335)と力説する。

さらに，同時期に『空像としての世界』(原題：*The Holographic Paradigm and Other Paradoxes*)を編んだK.ウィルバー(1983)は，その序において，「1970年にいたって，……きわめて高名で，謹厳かつ練達の研究者たち……の一群があらわれ，宗教と対話するのではなく，直接，宗教を語りだした」(傍点原著者)と述べ(10)，主題の「ホログラフィック・パラダイム([部分は全体へのてがかりをもつという]完全写像法による枠組)」(12–13)に関わる論考へと読み手を誘う。

この邦訳『空像としての世界』の取りまとめを主導した井上忠は，『現代思想』(1984年1月号)の特集「ニューサイエンス：〈知〉の新しい波」にて，伊東俊太郎と「ニューサイエンスのパラダイム」をめぐって対談している(井上忠・伊東俊太郎1984)。F.カプラの著作が時の話題となったことについて，伊東俊太郎[科学史]は，「近代科学や近代文明の批判」(120)といった潮流のもとでの「東洋の思想への接近」(121)と見て取り，「現代物理学と東洋思想の対比がやや並列的だ」が，「そういうパラレリズムを言い出しただけでも……問題提起者として大きな意味があった」(124)と評している。次いで，K.ウィルバーらが提示した枠組みには，井上忠[哲学]が，「ホログラフィ・パラダイムその

ものはかなりまじめな気がしている」としながらも，「これは結局，ホログラフィ・パラダイムという“理論”で世界を再構築してしまうのではないか。本当にわれわれが生きている現場を見ている議論じゃなくて，一つの新しい仮説ではないか」(127)との危惧を率直に明かしている。

『岩波講座 宗教と科学 別巻1』にて「“ニュー・サイエンス”をどう見るか」との課題を担った，ハワイ大学名誉教授[理論物理学・情報科学]の渡辺慧(1993)は，その「東洋風新科学」とは「東洋哲学で昔から言われていた意見と，最近の西欧科学の発見したものの見方に似たところがある，といったものに過ぎないのではあるまいか」(329)，さしずめ「仏教も老子も量子も，似ているから同じという論法が見え透いている」(330)と批評する。

1990年代には，『知の欺瞞』(原題：*Fashionable Nonsense*)にて「ポストモダン思想における科学の濫用」を提起するA.ソーカル[統計力学，場の量子論]& J.ブリクモン[統計力学，偏微分方程式](2000)が，「理性の凋落はかなり進行している」との見立てのもと，「一つの可能性は，ポストモダニズムが何らかの教条主義，神秘主義(たとえば，ニューサイエンス)，あるいは，宗教原理主義につながる揺り戻しである」(279)との懸念を表明している[(3)]。そして，「単なる夢想なのかもしれない」がと断りつつ，「われわれが望むのは，合理主義的ではあるが教条主義的でなく，科学の精神に則ってはいるが科学主義的でなく，諸々の意見に開かれてはいるが軽薄でなく，政治的に進歩的ではあるが党派的でない知的な文化が誕生することだ」(280)との道筋を指し示している。

なお，近年のSNSを通じた「感覚的なスピリチュアル文化」と突き合わせ，F.カプラの『タオ自然学』をかえりみる岡本亮輔[宗教学](2023)は，かつて「精神世界」のひとつの主題とは「東洋の神秘による西洋科学の超克」であったと説き，「わざわざ最先端の物理学を持ち出す」といった，その「生真面目さ」(57)に着目する。また，「一般読者には到底理解できそうにない難解な概念が頻出するにもかかわらず，それが広く読まれた点」(58)にも関心を寄せている。

2-3. 宇宙や“新科学”のとらえ方からの示唆

次のセクション以降の作業を見込んで，まずは，これまでに概観した諸氏の見方や考え方を，便宜的に，“私たち”の居(場)所，その“私たち”のありよう，人や社会/思想のつながり方，歩み・進め方を軸に再度汲み上げ，整理しておきたい。

■居(場)所とする極大な世界＝宇宙の描像

現今，《私たち》が居(場)所とする極大な世界は，《確率的に存在する量子の宇宙》と絵解きされる。それをいくつも《つなぎ合わせて，一枚の絵に》仕立てる《古典的な描像》に加え，その多宇宙(マルチバース)を《量子力学的な重ね合わせ状態》と見て取り，《エヴェレット流》に《多世界》と思考する《新たな見方》も概観した。もっとも，《同時に存在する多数の宇宙》の大方は《何もない宇宙》で，《たまたま銀河や星が生成した宇宙のどれかに私たちはいる》とされ，この世界には《観測》し得る《複数の宇宙が入っている》可能性があるという。

いずれにせよ，これから探ろうとする際立った状態も含め，何らかの観点からあらかじめ見出した諸状態を巧みに操る仕様に見えるのは，特に《確率》という語のためであろう。《多世界》とされる探究でさえ，実質的にはコペンハーゲン解釈的な眼差しでなされているように見受けられる。この《確率》については，言うなれば《観測》時の「発見確率[無数に観測を繰り返したときの結果の頻度]であって，存在確率ではない」との多世界解釈論者(和田1997, 111; ブルース2008, 317-318; 谷村2009, 57, 61参照)の見方も，ここに付記しておきたい。

■人間という生命体が抱き続けた“難問”，創り出す思考の枠組み

《地球生命/地球外生命》を視野に宇宙生物学的に考え進めると，《私たち》の《生命/生命活動/情報の伝達》のある特殊性に確かに気づかされる。また，人間なる《生命体》は，《いつの時代も，宇宙観と生命観の交差するところに》関心を寄せ，《私たちをより良く知るための機会》としたり，《空間/時間/変化とは何か》などの変わらぬ“難問”を《別の形で考え続けている》とも語られる。さらには，ある難局に際して，“対極”にあるような典籍などの立場に《発見したものの見方に似たところ》を探り当て，それを“拠り所”に《超克》するなどの言説も打ち出されてきた。ただ，いずれも“これぞ”という“語るに足る”際立った側面だけを引き出すさまに，コペンハーゲン解釈的な方便が見て取れる。

人間の《活動》にて見出された“斬新”な思考法が《世界を再構築してしまう》ほど影響力のある《パラダイム》となり得ることが察知される場合にあっても，当の見方・考え方は，ひとつの《仮説ではないか》と冷静に評する姿勢も示された。同時にあり得る無数の重ね合わせ，もつれ合い状態を都合よく操らずに保ち続け，思考をめぐらすなら，それは多世界解釈的なスタイルに通ずる。

■切り分けると顕在化するあるつながり方，まだ整理のつかない関係性

《境界》を引くたびにあらわになる《もつれ》という関係性や，《平面》に描かれたものが立体どころか《仮想的な宇宙》に現れ出るとの《AdS/CFT 対応》は実に興味深く，目を見張った。ただ，その“種明かし”は，観察時にその都度ある状態を選び出してくるコペンハーゲン解釈的な言説と見受けられる。個，都市，社会などの諸問題についても，同じくコペンハーゲン解釈流の作業でもって，先行きを見通し，“好ましい”状態が現れ出るように入念に線引きで分かつなり，抑圧・対立関係の絡み合い，重なり合いを図示する「交差性」をもとに闘い方を考えるなり（キンナ 2020, 163; 谷村 2023, 9 参照），さまざまな営為で，ある意味では《時空》を創出してきたともいえよう。多世界解釈的には，《境界》を引く前はもとより，《境界》を引いた後でさえも，あり得る無数の重ね合わせ，もつれ合い状態を絶えず深慮することを，臆さず記しておきたい。

現代にあっても，依然として《別々に理論化》された《描像》間の整理がつかず，大胆に前提から見直すことや，《どちらも基本的ではなく，……さらに基本的な理論が存在する可能性もある》との声があがっていた。多世界解釈にならう小論では，たとえ“確かな”整理がなされたとしても，さらに汲み出し得る描像や関係性があると考える。

■“変化”や“バランスのとれた”とする道筋

《私たち》の《宇宙観》は《大きく変わってきた》。この記述は，何らかの意義をもって選び出した《説/論》を時間軸に並べてみせた，いわばコペンハーゲン解釈的な言説と見て取れる。“確かな”/“確からしい”新《説/論》が現れ，それが指し示す針路とともに注目を集めて流れを成すと，旧《説/論》はわきに追いやられ，ときに無用のように扱われることさえある。

また，《曖昧/過剰な関心》や《知的混乱/濫用/極端な型》と見極められた思考や理路は，問いただされてきた。“筋の通らない”《主義/信念/言説》との《接近》で勢いづき，“制御不能”な状態に陥ることを恐れる視点からは，《揺り戻し》を懸念する声もあがる。こうした論評についても，《接近》という語に示されるように，個々に見出した特異な状態やそれらの関係性を説くコペンハーゲン解釈的な着想によるものと考えられる。

多世界解釈的には，善し悪しはともかく，あ

ることに関して，そのあり得る見方は―まだ提示されていない仮説も含めて―すべて同時に存在し，あり得る経路を―まだ探り当てられていない道筋も含めて―すべて同時に歩むととらえる。何らかの観点から“バランスのとれた”とされる考え方や歩み方が相応の頻度で見出されることはあろうが，“困惑する”ある状態が具合よく消え去ることはない。

3. 宗教（性）の解明や仏教思想の更新/再構築の試みから

3-1. 宗教（性）の説き立てられ方から

霊長類行動の世界的権威と称されるオックスフォード大学進化心理学名誉教授・R. ダンバー（2023）は，なぜ人間は「宗教を信じようとするのだろう」（20）との根本的な問いをめぐり，「神秘志向［人智を超えた世界を信じたがる人間心理］」に「宗教の起源がある」（22）との見方を提示している。そして，「宗教の出現」には，「人智を超えた別の宇宙があって，［意図を持った］霊的存在がそこにいることを想像でき」，さらには「そんな別宇宙がはたして存在しうるのか問いかける」（138）などの技量が求められるが，それには現生人類の「メンタライジング」［マインドリーディング］が深く関係している（134, 138, 279）とし，その鍵となる概念を次のように説き示す（137）。

> メンタライジングとは，私たちが直接経験する世界から一歩引いて，そこには別のパラレルワールド（相手の心）が存在すると想像する能力のことだ。目の前で展開する現実世界のふるまいに対応しながら，自分の心のなかでその別世界を形づくり，そのふるまいを予測しているのだ。ここで重要なのは，現実世界の一部として直接知覚できる相手の行動と，直接知覚できないから想像するしかない相手の意図……はちがうということ。つまり，心のなかで二通りの現実を同時進行させているのだ。

そうした「神秘志向」にあって，「別次元の意識のなかで強烈な没入感をともなうトランス状態を生みだすエンドルフィンの働き」（279）にも論及する著者は，「宗教の歴史」をたどり，「教義という立派な表看板の下には，いにしえの神秘的な異教の土台が隠れている」（34）と力説する。「教義宗教［世界宗教］」は，それに先立つ「シャーマニズム宗教［原始宗教］」に必ずしも「置きかわるというもの」でなく，「積みかさなったと見るべき」（32–33）と説き，それらを「出たり入ったりしている」（280）とも言い表している。

さらに，「世俗宗教［人智を超えた世界を信じなくても同じように高揚させてくれる代替宗教］」の試みが概して「幻滅」に帰した近現代史（285）をもかえりみて，「宗教は人間に深く根ざした特性で……中身は時代とともに変わるだろうが，良くも悪くも私たちから離れることはけっしてない」（286）と結んでいる。

『宗教社会学』の「全体的な見取図」を広げてみせる奥井智之（2021）は，その著述において「宗教とは，超自然的・超人間的な存在に対する信仰である」―より緩やかには「“聖なるもの”への信仰」―（21, 26）と定義した上で，「宗教の根源にあるのは，人間の知性の限界である」（21）と推しはかる。宗教は，言うなれば，「人間にとって不確実性（あるいは不可知性や不可測性）に満ちた」世界を「“確実なこと”として納得しうる」ように作動する「代替的な（alternative）システム」（21–22）で，それはさしずめ「一つの自己言及的な（self-referential）システム」（21, 279）―「“聖なるもの”は，信仰者によって“聖なるもの”と規定されるがゆえに“聖なるもの”であるにすぎない」（20）―とも説き明かす。

そうした「宗教の論理」は「宗教以外の領域」にも見受けられるとする著者は，法や貨幣を例示した後，「実際には“社会”そのものが，“社会”を“社会”として信奉するシステムである」と考察し，「それは，一定の“信仰のコミュニティ”に基礎をおくシステム」(279)であるとも強調している。

なお，国立民族学博物館共同研究事業の成果をもとに取りまとめられた『宗教性の人類学』(長谷他編 2021)においては，「“宗教”に加えて，“宗教性”［宗教っぽい］という［一時的な儚い］もう一つの補助概念」(長谷 2021a, 2; 2021b, 15)の導入が試みられている。その「曖昧な“宗教性の領域”」(17)をも視野に，「誰がどういう実践を宗教と見なすか，誰がそれに異を唱えるか，誰が“宗教”以外の語で語ろうとするか，それはいずれ宗教として認識されるのか，それともゆくゆくは誰も宗教と思わなくなるのか」(16)に着目して，「従来の宗教概念から離脱する」(17)なり，「道徳」「人権」「環境主義」などの関連概念を交えて「切り分け」直すなり(13)，「少しずれた形」の「どことなく宗教っぽさが残る」実践が読み解かれていく(15)。

長谷千代子(2021b)は，「もともと“宗教”とは，人が人生をかけて，世界の善き住まい方を追究する全方向的な取り組みのことを指す言葉でもあった」ことを踏まえ，「政教分離原則」や「マルクス主義的宗教観」にそった「輪郭を定める概念操作」(26)，さらにはその「概念イメージとそれをめぐる政治に惑わされることなく」(27)，「近接分野の知恵」を取り込み，諸概念を「柔軟に使いこなす言語表現と思考方法を身につけていくことが重要であろう」(26, 27)と説きすすめる。

3-2. 仏教思想の更新/再構築という視角から

仏教学・インド哲学にあっては，当該分野の重鎮である国立民族学博物館名誉教授の立川武蔵(2019)が，『仏教原論』を書き綴るなかで，これまで「欲望の実現に邁進(まいしん)してきた」人類がこの先「自分たちの手で世界を破壊」(2)しかねない難局を憂い，その打開策として，現代人に「空[4]」の広義な実践―「人間の飽くなき欲望」に対処する「否定の手」(2)の延伸―を提唱している(284)。

> 空思想では，個々人の有する煩悩や業(行為)が俗なる不浄なるものであると規定され，その俗なるものが否定された結果，聖なる浄なるものに接し，その直後には聖化を受けた俗なるものとしてよみがえってくると考えられた。これが空思想の歴史的，伝統的な理解であろうとは思う。しかし，空思想の有する「否定の手」は，単に個人的行為に延びるのではなく，空思想は集団的行為にも「否定の手」を延ばし，さらにその再生をうながす，と考えられないだろうか。つまり，企業，自治体，国家などの集団が行う行為にも疑問をつきつけ，批判し，そして社会の中でよみがえらせる作業もまた空思想の目指すところであると，思われる。

さらに，旧来の教説を堅く守るだけでなく，「近代の自然科学が明らかにした自然や宇宙の構造に基づいて新しい仏教的世界観を作りあげるべき」と提起するが，その作業にあっても上述の「否定の手」を通じ，そうした「仏教的な世界観が何を主張し得るかを考える必要があろう」(286)と付言している。

仏教学，日本思想史の第一人者，現東京大学・国際日本文化研究センター名誉教授の末木文美士(2006)は，『思想としての仏教入門』にて読者を導くにあたり，「仏教［の伝統］をどのように批判的に継承してゆけるか」(ii, 14)，その基本とされる諸概念を「解体して新たな可能

性を模索してゆくという」荒仕事を「いわば“反仏教”という作業」と称し，場合によっては読み手も「関わらざるを得ない問題として」(14)取り上げている。

仏教の「空(くう)は極めて不安定な思想で……否定の論法は鋭くても，積極的，肯定的なものが提示できない」ことを「仏教の弱点」(189)とも率直に述べた上で，インドや中国で「土着的な思想がその理論武装をするのに仏教の論理を借り，ひとたび自らの立場を確立するとともに，仏教は捨てられ，批判される対象となってしまう」末路をたどってみせる著者は，仏教のいわば「過渡的な思想」(193)たる側面を巧みに際立たせる。

現代哲学・倫理の場を意識して，思いを凝らす末木文美士(2019)は，地球温暖化，戦争・災害，核廃棄物などの難題を例に，人は「いずれは死者として後の世代の生者たちとかかわることになるはず」(306-307)と推しはかり，「死は決して終わりではなく，［死者となっている］私たちは死者としての責任を果たさなければならない」(307)と意表を突く。ことに「政治の問題」にあっては，「単に民主主義［(of the people)―生者］だけでは不十分で，民権主義(立憲主義[5])［(by the people)―生者＋死者］，民本主義［(for the people)―生者＋死者＋いまだ生まれざる者］が加えられなければならない」(308-309)と力説する。さらには，「菩薩のはたらき」にならうかたちで，平和，自由，平等の実現といった「理想へ向かっての歩みが死後にまで続くことを肯定する」(309)倫理観を提示している。

3-3. 宗教(性)や仏教思想のありようからの示唆

本セクションで概観した諸氏の見方や考え方についても，同じく，“私たち”の居(場)所，その“私たち”のありよう，人や社会/思想のつながり方，歩み・進め方を軸に改めて汲み上げ，整理しておきたい。

■人智の及ばないパラレル・ワールドも取り込み

《宗教の起源/根源》を探る作業においては，《直接知覚できない/知性の限界》ゆえに《不確実性/不可知性/不可測性に満ちた》世界に当惑する《現生人類/人間》の姿がまずは見出された。そして，そのような《予測/想像するしかない》という《現実世界》にあって，《人智を超えた［別］世界/別宇宙/パラレルワールド》や《霊的存在》を思い描き，より緩やかには《聖なるもの》の《自己言及的な/代替的なシステム》を働かせ，《“確実なこと”として納得しうる》状態との，《二通りの現実を同時進行させている》からくり・技量に目が向けられていた。いずれも，いわばコペンハーゲン解釈的な眼差しで，着目すべきとする“選りすぐり”の状態が並べられ，《パラレル》や《同時》の語に顕著なように，量子的な重ね合わせにある個や社会がとらえられていたように見受けられる。

研究の枠外も視野に，あり得る無数の重ね合わせ，もつれ合い状態を勘案し尽くすことは困難だが，宗教につき《中身は時代とともに変わるだろうが……私たちから離れることはけっしてない》や《実際には“社会”そのものが，“社会”を“社会”として信奉するシステム》との論考は，多世界解釈的な思考に寄せた記述とも読み取れる。

■生・死者の切れ目がないと考えられる私たち

先に《聖なるもの》の《自己言及的な/代替的なシステム》を働かせて“生きる”《私たち》がとらえられたが，《生者》だけでなく《いずれは死者として》の《私たち》も―その《果たさなければならない》とされる《責任》と合わせ―，グローカル社会の難題に対処すべき“担い手”として見出されている。《菩薩》を範例に，平和，自由，平等の実現といった《理想へ向かっての歩みが死後にまで続く》との考え方が《倫理》的とされる。さらに，“民衆本位”のあ

り方では，《いまだ生まれざる者》も含む枠組みが示されていた。

ここでも，例示とはいえ，コペンハーゲン解釈的な眼差しで“これぞ”という個のあり方，目指すべき状態が“提唱者”によって見極められているが，他のあり得る数多の状態が見えなくされてしまっている。《理想》として語られる平和，自由，平等という各要語自体が無数の重ね合わせ，もつれ合い状態であり，“ひたむきな声”に同調する素振りを見せつつ，“他意”をもって《死者/菩薩》が“操作される”ような“事態”さえあり得る。かりに《死者/菩薩》なる“アクター”を思い描くにしても，多世界解釈的には，「状態の収縮」は一切考えず，明示・論及されない他の状態も同時に共存しているとみることになろう。

■意外な“古層”とのつながり，そして体系や概念の“表層”的な当てはめ，仕分け直し

主題につき，重層性を見て取った際の“思わぬ”つながりが，工夫を凝らした言い方で表されていた。《立派な表看板の下には……異教［信じるものとは異なる教え］の土台が隠れている》《置きかわるというもの》でなく《積み重なった》のように重なりを立体的にとらえ，さらに《原始》なる“古層”とを《出たり入ったりしている》姿に目を留める。また，“表層”に《代替》体系をすえる試みで，《幻滅》との記述にあっては，その《理想》視されていた教えが《幻》にすぎずと悟らせる。

主題の《輪郭》自体を問い直す作業では，“本来”想定された《領域》より食み出す《一時的な儚い》揺れ・《曖昧》さを視野に入れて，当該概念枠からの《離脱/ずれ》，関連概念を交えた《切り分け》直しが吟味されていた。

いずれも，観察した際に見出し得る“有意”な一状態をまずは必要なだけ選出し，さらにそれらを重ね合わせた—ときにそれらがもはや重ならないとの—考察は，コペンハーゲン解釈的な言説と見て取れる。《輪郭を定める概念操作/政治に惑わされることなく》，諸概念を《柔軟に使いこなす言語表現と思考方法》は，あり得る状態をどれも消去せず，量子的な重ね合わせ，もつれ合いでとらえる多世界解釈的な思惟でも肝要だが，それはいわゆる《近接分野》との連係にかぎらない。

■“肝要な”とする路線，“憂うべき”とした窮途

先に《菩薩》なる個の歩み・進め方はみたが，人類が《世界を破壊》しかねない筋書に対して《企業，自治体，国家など》の《集団的行為》の再考・《再生》が緊要で，《近代の自然科学》をベースに《新しい仏教的世界観》の構築をはかり，《何を主張し得るかを考える》ことが求められていた。《仏教の伝統》，旧来の教説を堅く守る—“退嬰的”とも映り得る—常道との対比で，《批判的に継承/解体して新たな可能性を模索》する—《反仏教》とも称される—“進取的”路線が掲げられていた。

また，他の思考体系が《仏教の論理》を《理論武装》のために《借り》，しかるべき世界観・《立場を確立する》や，《仏教は捨てられ，批判される対象となってしまう》末路をかえりみては，その《過渡的な思想》という特質が語られていた。

いずれの高論も，“肝要な”とする路線/“憂うべき”とみる窮途への「収縮」を巧みにはかり，説き示す作法は，いわばコペンハーゲン解釈流である。なお《否定の論法は鋭くても，積極的，肯定的なものが提示できない》との《仏教の弱点》は，無数のあり方があり得ることを説き，「収縮」描写を一切考えない多世界解釈的な思考にも相通ずるところであろう。もっとも，多世界解釈的には，ある道筋が衰退・消滅したように見定められても，取り得る経路をすべて同時に歩むさまでとらえ直す。

4. 空海密教の“つくり方”，今日的な“生かし方”から

最初に，少しばかり“脇道”にそれる―小論的には，“同時に歩む”―が，『現代思想』(2022年8月号)の特集「哲学のつくり方」にて，「AIで哲学する/AIと哲学する」試みでもって「新しい哲学的概念を生み出す可能性」を検討する情報工学者の松井哲也(2022)は，「AIに誤読させる/AIを誤読する」(174)ことを通じた“普通とは違うありよう”への気づきや，そうした「AIとのインタラクション」にもとづく「創発」(179)への広がりに注目している。

また，同特集の討議「偶然性と多元性」(千葉・山口2022)では，千葉雅也が「現代思想のつくり方」として，「先行する理論からは排除されている根本的なレベルでの他者性を見つけて，その他者性を肯定するための超越論的な理論を立て直すことで，新たに自分自身の哲学体系をつくるというマトリックス」(9)を掲げる。千葉雅也(2022)は，この「原則」を足がかりに，さらに「ポスト・ポスト構造主義への展開」(187)を解説する際，そうした「逆張り」の一例として，パリ留学時に師事したカトリーヌ・マラブーが唱える「形態(フォルム)の可塑性(プラスティシテ)」―「**「すべては仮固定的に形態を持ちながらも差異化し変化していく」というようなタイプの差異概念**」(太字原著者)―(188–189)をあげている。

現今説き示されているこうした「哲学/現代思想のつくり方」を前置きとし，本セクションでは，空海による密教の“つくり方”をめぐる解説や，その機巧などへの批評にあたってみたい。

4–1. 空海密教の“つくり方”の読み解きから

高野山大学を代表する碩学，松長有慶(1982)は，『密教の世界』を概説する「生涯学習」講座にて，「密教の源流」から説き起こすにあたり，まずは東洋文化の全般的な「性格」として，「重層的[層を重ねていく]発展」(9–10)を指摘する。密教にあっても「バラモン教の宗教儀礼から，ヒンズー教の神々から，一切合財(いっさいがっさい)ぜんぶ包みこんでいる」(11)とし，しかも「密教の非常に大きな思想史的な意味」とは，「それまでにあるものをぜんぶひっくるめて，そして自分のシステムでぜんぶ組織し直す」(21)，「捨てるものはちっともないのだ。持ち味をぜんぶ活かしきっていこう」(22)，「何でもいったんは認め，形はそのままにして，精神は仏教的なものに入れ替えていく」(26)―「いのちを，ぜんぶ本来の仏教的なものに切り替えていく」(21)―ところにあると強調する[(6)]。

唐中期，中国仏教の大翻訳家，不空(ふくう)[705–774]は，「大宇宙と自分との一体感」を軸にすえた―つまりは「国家意識」に疎い―「インド的な密教」(29–31)を何としても中国に「根付かせ」ようと苦心し，「鎮護国家」(30)なる説き示し方を編み出す。インドから持ち込む「中心的な密教経典」の「呪術的な効用を，そのまま鎮護国家に組み替え」，「国家宗教」へと「質の転換」(30–31)をはかっていくその手腕に，学僧の著者は，いわば「内容を180度変えて」漢訳を完遂した「意図的な誤訳家」(31)としての素顔を見て取る。すかさず，「そういう形でしかほかの国に広がることができない」情勢のもとで「これはいいとか悪いとかいう問題」ではなく，「そういう事実があるということ」(31)との所懐を添える。そして，密教のさらなる東漸にあっては，日本では弘法大師・空海が「一人の人格のなか」において「インド的な性格は，極端にいえば高野山的なもので残し，そして中国的な鎮護国家的な色彩というのは，京都の東寺でやっていかれた」(37)と読み解く。

あわせて，松長有慶(2022)は，『空海』自身に特有な思考術についても簡明に説き明かす。一段と「深い意味の読み込み」[深秘釈(じんぴしゃく)]へと進み入るにあたり，空海は，しばしば「ある存在，

ある思想に対して，一般とは異なる特殊な解釈」を施す。その際立った技巧とは，独自の「密教眼」からの文字や思想の「読み替え[7]」(96–97, 115)という。

「文字の読み替え」では，[1]「六大説」の「大」を「世界を構成する物質的な要素」(98)という意味でなく，「全体性，普遍性を保持する宇宙の森羅万象の，六種の個別的なあり方」(99)とする視座の提示，[2]「加持という，サンスクリット語では一語であったものを，加と持に二分する」ことで，それを「入我我入」(101)へと接合し，「加持の内容を独自の思想でもってさらに展開」(102)といった実例が紹介されている。また，「思想の読み替え」では，[1]一般に「仏教の教え」として決まり切ったように語られる「否定的な色彩の濃い思想に対して，密教ではすべて肯定的な思想でもって読み替える」といった「生き方」の説きすすめ(109, 111)や，[2]密教の包摂的な観点から「顕教経典」を「密教経典」として「読み替え」，「評価」(112–114)する作業が例示されている[8]。空海が『般若心経』に「独自の見解」を展開した『般若心経秘鍵』(112–113)からは，「顕密は人に在り，声字は即ち非なり」—顕と見るか，密と見るか，その判断のわかれ目は，対象物ではなくて，それを見る人の判定能力の差によるのだ。表面的な声や文字だけで判断してはならない—(114)との観察眼に関わる言葉を引いてみせる。

4–2. 空海密教の“生かし方”を探る観点から

名古屋大学名誉教授の宮坂宥勝(1994)[初版1967，改訂版1982]は，空海が晩年に淳和帝へ撰進した『秘蔵宝鑰』—主著『秘密曼荼羅十住心論』の略述書—(12, 299)を軸に『密教世界の構造』を描く際，「十種」の「住心」[心の在りかた，世界観](58)が織りなす「十住心体系」なる思考法の「現代的意義」(266)も引き出している。『秘蔵宝鑰』とは，「本来，密教の世界を目指して修行する者の心の発達段階を明らかにするとともに，仏教の教理批判をおこなったものである」が，今日的には「人間学（アンソロポロジー）という意味において人間の種々相を解明し，それに思想の歴史をオーバーラップさせたものと解することができるであろう」(283)との視角から，具体的には，現代人が「学びうる主なテーマ」として，次のような指針・立場を例示する(266)。

[1]複合文化主義：密教の本質そのものに由来するもので，文化の複合性ということ

[2]思想の綜合的普遍主義：密教の中には，寛容の精神，調和の精神，全体的な統一原理と発展の法則とを掬（く）みとることができる

[3]多元的な価値観：密教では，①絶対唯一というものの見かたを排除する ②一切の思想，文化に座標軸を与える

また，「現代における世界的な思潮……と密教との関わり方」(284)に関心を寄せる著者は，巻末の「密教と現代思想—曼荼羅的発想—」にて，たとえば，「樹木関係とリゾーム（根茎）関係」といった視座について，それぞれ「九顕一密（『秘蔵宝鑰』）の竪差別の世界」と「九顕十密（『十住心論』）の横平等の世界」に対応すると見て取り，さらに密教にあっては「横竪不二」であることを踏まえ，それらを「統合し」なおかつ「内含している」(274)と説いてみせる。密教は，「近代合理主義の反極として捉えるべきものでなく，むしろ……近代合理主義と非合理主義，神秘主義的思潮とを包摂しながら両者を調和融合するこれからの新しい思想の方向性を示唆しているとみるべき」(276)と結んでいる。

ときに，1990年代初頭，「世界史的に激動の時代」にあって，「宗教学の分野」においても

旧来のいわば「体系的というよりは……問題提起的でありたい」との方針のもと，東京大学宗教学研究室につながる「気鋭の研究者たち」によって『現代宗教学』全4巻が編まれている（脇本 1992, i-ii）。『現代宗教学 2 宗教思想と言葉』の「はしがき」には，「教典や教義書に語られている事柄を読解すること」といった「常道」にとどまらず，「そもそも宗教思想を理解するとはどのようなことなのか」，「どのようにして……理解が可能になるのか」などの「問い」へのこだわりが述べられている（市川・島薗 1992, v）。

その第II部「思想・テクスト・理解」にて，松本高志（1992）は，「空海の解釈のために」とする論考を巧みに展開する。「言語における重層性は，そのまま説法における重層性につながるはず」と推しはかり，「密教における救済論」（126）へと考察を進めるなかで，著者は，「自受法楽」などを例に，既成の枠組みからはいかにも「パラドックス」と指摘される局面に際して「これを積極的に取り入れる人間観を成立させたところに密教の特徴がある」（133）と見定める。そして，「密教が密教のままで説かれ得るかぎり，“説かれ得る”という事実のなかに」，そうした「相容れぬ」/「認めない」とされたありようが「展開し得る可能性，あるいは必然性」（126, 133–134）を見て取る。

さらに，2018年10月臨時増刊号『現代思想—総特集 仏教を考える』では「仏教の可能性を考える」区分けで，阿部龍一［密教学/仏教と文学・絵画］（2018）が，「『十住心論』の歴史的文脈とその現代性をめぐって」との観点から「空海のテクストを再構築する」という作業を試みている（98, 116）。「奈良末期から平安初期に活躍した空海自身の視点」で語られる「密教」とは，いわゆる「宗派」の「“宗”（本来は特定の経典や論書に依拠して立てられた学派）とは異なる，それより大きなカテゴリーとして」の「位置づけ」（99–100）であったことなどに論及した後，著者自身は，「現代社会が直面する諸問題」への応手を視野に「君主論としての『十住心論』」（103, 113）に着目する。そして，「儒教が政治のイデオロギーとして重視されていた時代」（105）にあって，「空海のテクスト」が「王権と仏教」とを強く結びつけた主要因に，「儒教的除災論の弱点を補填して王権の正統性を儒教より有効に保証する力」[9]や「王と僧のはっきりとした棲み分け［分業化］」[10]—をあげている（112–113）。

なお，日本美術史を専攻する内田啓一（2010）は，法藏館のシリーズ「権力者と仏教」にて，ことに『後醍醐天皇と密教』に焦点を合わせ—極めて慎重に「やや偏った後醍醐天皇像を描くかもしれない」（10–11）と断りつつ—，「密教のさまざまな灌頂を受けて，しかも自らは出家をしていない俗体［世俗の身］のまま修法（すほう）を行じている」（9），さながら「密教界における王権の地位を目指していたかのようで」（13），「自らと空海を重ね合わせ」（158），「空海と同じになろうとしていた」（224）姿を詳述している。また，父の後宇多院を軸に「一族内で付法師弟の関係」（62）が築かれ，後宇多院の皇子，後醍醐天皇の実弟である密教僧・性円により，建武2年［1335］には，「祈雨（きう）」の「大法・秘法」が修されたとの事績（65–68）などをたどっている。さらに，「後醍醐天皇の皇子たち」にあっては，「聖と俗の間を行き来している」（113–114）ありようをとらえている。

4–3. 空海密教に関わる考究からの示唆

本セクションで概観した諸氏の見方や考え方についても，同様に，個の居所，個のあり方，人や組織/思想のつながり方，歩み・進め方を軸に再度汲み上げ，整理しておきたい。

■人物の“顕著”な側面とともに語られる活動展開の拠点・舞台とそのありよう

《一人の人格のなか》において，その人物の“顕著な”側面にてらし，“相応しい”とされる活動展開の拠点・舞台が見定められていた。観察の対象・時期などにより，言い当てられた状態が“異なる”/“変わる”こともあろうが，見出された状態の言い表し方をあたると，《王/僧》のありようを簡明にとらえる考究では，他とする方の役割や《力》と突き合わせて,《棲み分け》—すなわち，同じ場にも棲み得るのに衝突しないように分け合っている現象—なる概念で素描されていた。また，異なった《性格/色彩》や立場をあわせ持つ状態に着目する論述では,《インド的》と《中国的[鎮護国家的]》のそれぞれに対応する本拠を構えたり，《聖と俗》とを使い分け,《行き来している》ように説かれていた。

いずれも，コペンハーゲン解釈的な眼差しでもって“肝要”とする状態を抽出し，ことに複数の状態に着眼する場合はそれらを《重層》化したありようの絵解きである。多世界解釈的には，それらをあり得る「無数の状態」からの例示ととらえるならば,“分け合い”/“使い分け”,“行ったり来たり”と記される際のもつれ合い/重ね合わさった各状態が—読み取りがたい“潜在的”とされる競り合いの諸局面を含め—「同時に共存している」さまを思い描くことになろう。

■相反して成り立たないとされる個のあり方の読み解き

個のありように関して，特に《心の在りかた/人間の種々相》—ひいては《世界観/思想》—に着目し，それらを明快に《十種》に割り振る一大《体系》では,《段階》的な観点のみならず,《包摂》という視座の重要性が強調されていた。また，その《現代的意義》としては,《複合》《綜合》《寛容》《調和》《多元》などの重要概念が汲み取られてきた。基本的には，これらはコペンハーゲン解釈流に極めて手際よくなされた考究と見て取れる。ただ，いったん観察し得る“注目すべき”状態を並べてみせた後，その整理のために引いた枠線をいわば取り払う段では，あたかも例示的に排列された諸状態が同時に重ね合わさっている量子的な個のあり方のようで，空海密教なる観点からの描像における多世界解釈的な思考と読み取れる。

《学びうる》見地には,《絶対唯一というものの見かたを排除》と端的に示されていた。さながら，あるありさまを人為的に捨てられるかのような記述であるが，“眉をひそめる”，“遠ざけた”とされ得る考え・姿勢も同時に重ね合わさっていることをひとたび踏まえた上での“方向づけ”—しかるべき状態への「収縮」—と推察する。さらに，行きいたる仏なる個のあり方で《パラドックス/相容れぬ》とされる状態が《展開し得る可能性/必然性》について《密教が密教のままで説かれ得るかぎり》との読み解きにあっては，観察対象を量子的な重ね合わせ状態のままに，多世界解釈的に説くかぎりといった見方と相通ずるであろう。

■“あり得ないわけではない”つながりの探索

《重層的発展》にて，その積み重ねる《層》となる教説の形成にあっては，独自の観察眼から，ときに《意図的な誤訳》《特殊な解釈/深い意味の読み込み》《読み替え》などの作業で見出された“着目すべき”つながりや意味合いが提起され,《システム》の《組み替え》や《質の転換》がはかられてきた。これには，量子化学の「共鳴」で,「存在しないわけではないが……まれにしか出現しないと考えて無視することに」(都築 2002, 212 参照)とされてきたある結合状態が明かされ，その描像のバリエーションを改めて振り返るような解説が，ふと思い浮かぶ。

《捨てるものはちっともない》《ぜんぶ活かしきっていこう》との語り口は，一見「収縮」を一切考えないような立場に見える。しかし,《仏

教的なもの》へと―あるいは《密教眼》で―《入れ替え/切り替え/読み替え》とされるように，その視座からこだわる必要がないなり，“些細”な状態はおのずと消去される。多世界解釈流の仕様と見紛う論述であるが，これは―善し悪しでなく―あり得る無数の重ね合わせ，もつれ合い状態から，さしずめ《優》《調和融合》とし得る局面に「収縮」をはかるコペンハーゲン解釈的言説である。

なお，《政僧》ばかりか，《権力者》の《一族内》に築かれた《付法師弟の関係》解明においても，複数の“顕著”な私を兼ね備えた―ときに，歴史上の英傑との《重ね合わせ》をも思い描く―要人の相互作用に，“共鳴”構造のようなつながり方が見て取れた。

■“常道”からはずれ，理路の付け替え

ことに《世界史的に激動の時代》とされるような時期に，“時代感覚に合わなくなっている”ような対象を観察する場合，その分野にて《常道》とされてきた“変わらない道”から意識的にはずれ，より根源的なところから説き起こす《問題提起》といった見地からの模索が見られた。また，“原点”へさかのぼり，一大《体系》を構築した人《自身の視点》でもって“本来”の《位置づけ》を確認し直し，その今日的な《可能性》を討議し得るとみる理路への付け替え―下準備としては，それに有用とする諸状態へ改めて順次「収縮」させる―作業もなされていた。

このセクションでは，少しばかり“脇道”にもそれた―同時に歩んだ―が，新たに進み行く路を切り開くにあたって，道具はさておき，《誤読》を通じた思いがけない状態への気づき/《創発》が，なおも肝要と語られている。“新しい”《体系》をみずから創出するノウハウにおける《形態（フォルム）の可塑性（プラスティシテ）/仮固定的》なる状態のとらえ方については，コペンハーゲン解釈的な「収縮」状態を「仮描写」とみなす心得と推しはかってみたい。なお，考察し得る「同時に共存している無数の状態」の全体を見渡す多世界解釈的な作業においては，多《形態》にかぎらず，ここに例示した「多経路」なども含むとみる。

5. インド後期密教が行き着いた“無上”とする新境地をめぐって

5-1. 『秘密集会タントラ』や『時輪タントラ』が試みた世界観の“つくり変え方”の読み解きから

松長有慶編『インド後期密教』[上下2巻]は，おもに上巻を「方便（ほうべん）・父（ふ）タントラ系の密教」(2021a)，下巻を「般若（はんにゃ）・母（も）タントラ系の密教」(2021b)にあて，第一線の専門家による研究成果をもとに，その2大潮流を詳密に描出している。先覚の松長有慶は，それぞれに「忿怒の仏が放つ宇宙エネルギー」(2021a, 3)，「人間の生命力と宇宙エネルギーの共鳴」(2021c, 3)といった平明な序説を添える。また，各論において，無上瑜伽密教の初段とされる父タントラの代表的な聖典『秘密集会（ひみつしゅうえ）タントラ』の解読では，「主役はだれか」(2021b, 48)との関心を引く問いを切り口に，「[否定され，排除されるべき存在であった]煩悩が仏になる」(48)，「主尊の交代」(49)，「大毘盧遮那」と「毘盧遮那」との仏身観に依拠した「使い分け」(53)や，「究極的に大宇宙と小宇宙との根源的な同一性」までを見て取る「双入（そうにゅう）[一切の対立原理を二元のままに一元化する働き]」(69)などを説き示している。

立川武蔵・頼富本宏編『チベット密教』の「思想篇」にて，その「即身成仏理論」の解説を担う平岡宏一(2005)は，ことに『秘密集会タントラ』に深く関わる「幻身（げんしん）」という「無上ヨーガ・タントラのもつ独自の身体観」(78)に論及する。ゲルク派の開祖・ツォンカパ[1357-1419]の思惟を踏まえ，「幻身とは意識の上だけでなく，体外離脱して，マンダラとともに本尊（ほんぞん）の身体を本当に出現させること」(80)と述べ，それが「衆

生救済のためにいつでもどこへでも行ける」といった一段と「迅速で効果的な利他をめざす理念」(90)に根ざしていることを力説している。そして，たとえ「幻身が成就できなくとも，その構造を理解するだけで大きな功徳があるとされる」(90)とも記す。

インド密教のいわば「最終段階」には，いよいよ「それまでの無上瑜伽段階の密教を総合する『カーラチャクラ・タントラ』が出現した」(松長 2021c, 11)。『インド後期密教』下巻の終章で，密教学・チベット学が専門の田中公明は，この「不二タントラ」を「インド仏教の総決算」(2021, 174)として説き明かすが，そうした観点から概説した世界初という旧著『超密教 時輪［カーラチャクラ］タントラ』(1994)も合わせ，次のような要点を提起している(1994, 5, 62–63, 97, 227–230; 2021, 214–217)。

・倫理的道徳律や救済論的な因果を強調する従来の仏教に比して，『時輪タントラ』は物理的因果律の側面を最高原理として力説する。
・『時輪』は，字義通り「時間のサイクル」に注目。宇宙の生成と消滅は，最高神の恣意でなく「時間的周期」で繰り返し生起と解釈し直す。いわば特異点の存在を認めない宇宙論。
・そうした宇宙論と生理学説を統合し―宇宙の構造はマクロコスモス，人体はミクロコスモスととらえられ，両者のパラレルな関係を軸に―，密教の巨大な思想体系を構築している。
・概して静止画と考えられた曼荼羅にも時間的要素が持ち込まれ，その観想とは須弥山世界や衆生の生成・消滅過程とパラレルとされる。
・このような科学的認識は，世俗的な真理にすぎないとされるが，それは究極的真理を悟るために必要な知識であるとも考えられた。

最後に，現代における『時輪タントラ』研究の意義に思いを凝らす田中公明(1994)は，『時輪』とは「現代の科学水準から見れば，色々と陳腐な主張も目立つが，当時としては最高の自然哲学」と振り返り，「大乗仏教は，世界でも屈指の高度な精神哲学を創造したが，密教は，精神哲学のみの顕教に飽きたらない人々によって提唱され……その密教から，巨大な自然哲学の体系が生まれた」(232)ことを改めて強調する。そして，この先駆的な研究者は，次のように結んでいる(233)。

> 自然哲学は，その時代の自然科学の水準を超えることができない。したがって当時はどのように最新の科学的知見を反映したものであっても，時代が経てば全く陳腐なものになってしまうのである。
>
> しかし，自然哲学を切り捨て，個人の実在や，厳密な学としての哲学に関心を集中させた現代哲学は，果たして豊かな成果を生んだであろうか？
>
> ……『時輪』の自然哲学は，それがたとえ「壮大な流産」であったとしても，現代の思想界に貴重な示唆を与えているように思われてならない。

田中公明(2021)は，『カーラチャクラ・タントラ』の「まとめ」では，「“最高の不変大楽”は，感覚器官を介さない自覚智であるとされている」点を述べた上で，さりとて「現実世界の物理的因果律と科学的知見を重視し，それを仏教の体系に組み込もうとした努力は，現在もなお高く評価されるであろう」(219)と重ねて力説する。

5–2.「チベット仏教・密教」の“用いられ方”を探る観点から

『アジア仏教美術論集』(宮治昭他監修)にて「東アジアⅤ 元・明・清」の第Ⅱ部「チベット仏教からの視座」の責任編集を担う森雅秀(2022)は，その「総論」において，中国とチベッ

トとの絡み合いをいわゆる「施主と僧侶(法師)の関係」(28)から説き起こし，「清朝崩壊後のチベットが置かれた苦難の状況は，施主と僧侶の関係が成立しなくなったことが最も大きな要因であろう」(29)と推しはかる[11]。そして，同書にて「チベット仏教における芸術と政治」を歴史的にたどるK.デブレクシニー[ルービンミュージアム学芸主任](29)の視点へと誘っている。

K.デブレクシニー(2022)は，「民族や氏族を超えて，異なる人々の集団をひとつにする普遍的な聖なる王権のモデル」を提示する「仏教はとりわけ征服王朝にとって魅力的であった」(520)と説き明かし，「政治の場」にあってはその「信仰こそが正義にいたる道」や「権力の手段」とされ，その「儀礼」は「潜在的な武器」となり，「芸術がその媒体であった」(521)と論じ詰める。具体的には，次のような局面を例示している。

[1]チベット王国/観音の聖地にて

・8世紀後半，大日如来はチベットの国家的宗教の中心的存在となり，皇帝は宇宙の主宰者としての大日如来と同一視され，王国はそのマンダラを拡大したものとされた(524–525)。
・17世紀半ば，ダライラマ5世は自らを観音菩薩の転生者とし，過去の栄光の国王らを継承。王国の創始者であるソンツェン・ガンポと重ね合わせ，同一視する視覚表現をとる(546)。
・対立する派の高僧の生まれかわりとされたザナバザル[モンゴル人初の転生ラマ]のチベット到着時には，ゲルク派の言説にて，その転生・系譜を効果的に塗り替えて歓迎した(550)。

[2]征服王朝の元にて

・13世紀，フビライはチベット仏教を重んじ，タングートに見られたチベットとの「施主と僧侶の関係」を意識的に受け継ぐ(531, 533)。
・フビライの肖像は文殊の姿とされた―これは，後に満州人が中国を制圧し，自らをフビライの精神的，政治的な後継者で，同じ仏の化身と宣言した際に重要な意味を持った―(541)。

[3]漢人王朝の明にて

・民族アイデンティティの再強化に注力したと言われるが，チベット仏教は宮廷での有力な信仰であり続けた。すでに受容されている権力の用語を，自らの権威の宣言に用いた(542)。
・永楽帝は疑惑に覆われていた支配を正当化するため，フビライとパクパ[チベット人の宮廷僧]の関係を，カルマパ[元朝最後のチベット宮廷僧]と自分の間に築き，自らは転輪聖王の姿に扮した(532, 542–543)。

[4]征服王朝の清にて

・満州の皇帝たちは，モンゴルの支配者一族と直接の血縁関係はないが，チベットの転生システムを利用してフビライの生まれかわりであるとし，元の正統な継承者となった(547)。
・施主と僧侶の関係にあったフビライとパクパが当代の皇帝と宮廷僧に転生したととらえ，できごとに平行関係を作り，何度も生まれかわりながら常に関係があったと広める(549)。
・もっとも，チンギス・ハンの政治的権力が輪廻転生と結びつくことで，宗教的権威と一体化することを危惧したようで，満州人はモンゴルから転生者を見出すことを禁じた(552)。
・清朝に併合されたモンゴルにあっては，『時輪タントラ』の特別な寺院が建立され，仏教の新たな黄金時代が少しでもはやく到来するように，僧侶によって儀礼が行われた(552)。
・ムスリムやキリスト教徒などから清を脅かす武力行使がなされると，『時輪タントラ』のそうした言説はモンゴルの動員へとつながり，没落する清朝を救うために用いられた

(552)。

[5] 現代中国において

・輪廻転生に対する信仰と呪術的効果に依拠する宗教・政治システムにもはや支配されていないが，2018年，当局は，国家の最高指導者が仏教の活仏と考えられると発表(554, 558)。

このように「政治的な重要性を帯びるようになった」チベット仏教・密教の大要を述べる著者は，「おわりに」にて，これは「チベットの歴史的そして芸術的な位置づけを理解するための数ある方法のひとつにすぎない」(553)と注意を促す。そして，「たとえば」として，「儒教の天命という観念のような，政治的な合法化の他のシステムと平行関係を持つ」(554)とも付言している。

なお，先にみた『宗教性の人類学』の研究グループにおいて，「現代チベットの環境主義運動[12]」を事例に「“生態文化”をめぐる政治と宗教」を考察する別所裕介(2021)は，近年「仏教」ならびに「その下位カテゴリーの中で実践されてきたチベット人の日常的宗教実践が，“環境保護”という領域へ移し替えられていく実情」(144)を簡明に絵解きしてみせる。

従来，「民族」の「文化伝統」は，経済的に「観光開発の資源」(156)などとして用いられてきた。現今は「官製環境主義」なる「ナショナルな潮流」のもと，「“民族”としての政治集団性に抵触することを避けながら」を基本線に「自然環境との接合面に限定された宗教実践を“環境に優しい行い”として標榜」(145–146)する時局を大観する著者は，「これまで“民族”という集団に一体化されてきた“文化”を“生態”（自然）の側へとくっつけ直すことで……国家と民族の政治関係に対する締めつけの構造から“文化”を掬い出す方向へと転換」(157)といった見立てを力説する。「現地チベット人」を「重要なアクターとして」引き込んでいく，そうした「生態文化」「草の根の活動」なる施策も，つまるところは「国家にとって国民統制のためのツール」(165, 170–171)と見透かす。

中国式の「官製環境主義」とも，いわゆる「近代的環境主義」―「“私たちの暮らす地球”という惑星全体への認識と関心」―とも異にする，「仏教環境主義」「慈悲に基づく調和の実現」という方途に根ざす，「ローカルな着想」にもとづく諸活動に着眼する著者は，「現場における現地住民の価値認識との意識上の重大なズレ」(162–164)，さらには「宗教性のフロンティア領域」での―「線引き」「レッドゾーン」「裁量」などに見受けられる―「未決定性」(170)を鋭く指摘する。

5–3. インド後期密教に関わる考究からの示唆

本セクションで概観した見方や考え方も，同様に，個の居所，個のあり方，人や組織/社会/思想のつながり方，歩み・進め方を軸に改めて汲み上げ，整理しておきたい。

■循環過程にあるマクロ/ミクロコスモスにおいて

《王国》は《マンダラを拡大したもの》と語られるように，その領域には，《無上》な状態にいたったとするインド後期密教の世界観・世界像が重ねられ，大掛かりに取り立てられてきた。そうした《聖地》に《衆生》の所在を見出した人々は，具体的には，巨視的なるものには《宇宙》をあてがい，微視的には《人体》を振りあて，それぞれの《生成・消滅過程/周期（サイクル）》の主たるステージや，それらの《パラレルな関係》に関心を向けてきた。

実践にあっては《迅速で効果的な利他/衆生救済のため》とのスタンスのもと，《曼荼羅》や《即身成仏》の思考法を働かせ，《いつでもどこへでも行ける》“瞬間移動（テレポーテーション）”のごとき技法・《構造》が説かれてきた。厳しい時局では，待

ち望む状態がその地に《はやく到来するように》,《時間的》な“早回し”も企図された。なお，現代中国では，概して政策的観点から，人々はしかるべき《ローカル/現地》にくらす状態で見出されている。

《曼荼羅》や《時輪》の作意は，量子力学的な思考・描像と相通ずるように見受けられるが，居所，そのレベル/循環過程，他所への“瞬間移動”，それを支えるスタンスは，いずれもコペンハーゲン解釈的な眼差しで力説されている。多世界解釈的には，同じ要語においてさえ，見通された状態のみならず，他の諸状態も共存していると考える。

■指導的な役割を果たす者が身にまとう特定の“量子的自己”

個のありようについても，量子的な重ね合わせ状態にあるような構図で説き示されるが，これもコペンハーゲン解釈的な「収縮」描写を思い起こさせる。指導的な役割を果たす者は,《自ら》に，“有用”な《身体》―特定の《如来/菩薩/高僧》や《王国の創始者》―を，《転生/生まれかわり》や《同一視》といった言説でもって“寸分違わず”《重ね合わせ》，企図した“量子的自己”(13)とする。ときには,《重ね合わせ》の一状態を差し替え，より“有為”な《転生・系譜》への《塗り替え》がはかられている。また,《重ね合わせ》の“枢要”な一状態に着目し，その《化身》であるとの物語を作り上げ,《後継》の根拠ともされた。

その根源にさかのぼって聖典の解読にあっても，総じて《否定され，排除されるべき存在》の取り立て,《中心的存在》の《交代》,《仏身観》による《使い分け》,《幻身》などの言い表し方に，適宜の「収縮」処置がなされたと見て取れる。

多世界解釈的に思考する際の「同時に共存している無数の状態」には，現代社会にてよく論じられる《国民》《現地住民》《アクター》などの括りのほかに，諸種の力が働き，操られる状態も含まれることに気づかされる。ある《如来/菩薩》をまとっても，その《身体》自体が重ね合わせで，掲げられた「収縮」描写だけでないと推しはかる。

■パラレルな関係の作り込みや，上書きによる削除・更新

二領域間の結びつきを振り返ると，この観点においてもコペンハーゲン解釈的な思考で，概して有為とされる“結合構造”が個々に選び取られるさまが見て取れる。典型的には,《普遍的》なありようを醸し出せる《施主と僧侶の関係》を《意識的に受け継ぐ》として,《皇帝と宮廷僧》の関係強化―ときに，名高い先例の《転生/生まれかわり》であるとの《平行関係》の作り込み―, さらには《芸術》などを“舞台装置・道具”にその浸透がはかられた。また，“他派”の有力な物語づくりには，先手を打って封じ込めもなされた。

また，他の社会体制―ある種の《宗教性》―を際立たせたい勢力からは，“旧来”のつながり方は概して“取るに足らぬ些細なこと”で，“存在しないかのように”あしらわれ，《成立しなくなった》と観念するように仕向けられてきた。そればかりか,《移し替え/くっつけ直す》など，“新しい”とする要用そうな結びつきを巧妙に“上書き”する技法でも，“旧来の陋習”とされる世界観・世界像の“削除”や“更新”がはかられ得る。

都合よく一状態の選出/継承/差し替え，仕分け直し，他状態の消去/阻止などがはかられても，多世界解釈的には，分子構造における「共鳴」のように，あり得るつながり方をすべて重ね合わせてとらえる。

■“無上”なる一到達点，今後考えられる一道筋

インド後期密教の展開をたどる作業にて，未知なる理路の切り開き方が高く評価されていた。《従来》の観点・枠組みに《飽きたらない人々》

が異分野の《科学的知見》や《学説》を踏まえた まさに“新領域”研究を推し進め，《当時としては最高の自然哲学》が構築された。今や，時を経て《陳腐》であるとしても，その経緯は《貴重な示唆を与えている》と称説されている。多世界解釈的には，考え得る無数の理路/路線/経路をすべて同時に進む「量子ウォーク」を推考する。そのためには，“確立された”路線でも，“新たに”打ち出された路線でも，いずれにせよ，まずは未だ見出されていない道筋を“汲み出し”続けることが肝要となる。

ときに，《無上》や《最終段階/総決算》といった言い表し方が見受けられるが，それらは観察対象について，当該フェーズにあっての見解ととらえる。今後，近現代社会を振り返り，“ポスト・インド後期密教”を新たに《権力の手段》とし，その《儀礼》を《潜在的な武器》に仕立て上げたい勢力によって，かりに現代物理学や人工知能を取り込んだ理論化が実質的に進めば，それこそ，その“タントラ”には《無上》に比肩する語が添えられるであろう。その際，多世界解釈的には，なおもその特定の理路だけではなく，あり得る他の路線との「量子ウォーク」を力説することになろう。

6. さらに考え進める〈多世界解釈的な「量子都市ガバナンス」〉の記述

最後に，各セクションの要点を，[1]居場所/居所（個がくらす/身を置く地点），[2]“私たち”のありよう/個のあり方，[3]人や組織/社会/思想のつながり方，[4]それらの歩み・進め方を軸に簡潔に振り返り，さらには“ポスト・インド後期密教”や都市/社会の“スマート化”と称して操られ得る“新語”を少しばかり推しはかってみる。その上で，一連の本研究にて少しずつ練り上げてきた〈多世界解釈的に考え進める「量子都市ガバナンス」〉の記述を，“さしあたり”として，改めて整えてみたい。

[1]居場所/居所（個がくらす/身を置く地点）につき

■「多宇宙（マルチバース）」なる極大な世界の描像

・《確率的に存在する量子の宇宙》の《古典的な描像》は《つなぎ合わせて，一枚の絵に》，《多世界》思考では《重ね合わせ》とする。この世界に《複数の宇宙が入っている》可能性がある。

・その《多世界》とする探究でさえ，コペンハーゲン解釈的な眼差しでなされている。《確率》とは，《観測》時の「発見確率［結果の頻度］であって，存在確率ではない」ことに留意したい。

■人智の及ばないパラレル・ワールドも取り込み

・《予測/想像するしかない》という《現実世界》で，《聖なるもの》の《システム》を働かせ，《“確実なこと”として納得しうる》状態との《同時進行》をはかる仕組み・技量が目を引く。

・宗教は《時代とともに変わるだろうが……私たちから離れることはけっしてない》，《実際には“社会”そのものが，“社会”を“社会”として信奉するシステム》と，あり得る状態を勘案する。

■人物の“顕著”な側面とともに語られる活動展開の拠点・舞台とそのありよう

・人物の“顕著な”側面にてらし，ときに“相応しい”拠点・舞台が見定められ，同じ場に棲み得るのに衝突しないように《棲み分け》たり，《聖と俗》を使い分け《行き来している》とされる。

・多世界解釈的には，“分け合い”/“使い分け”，“行ったり来たり”と記される際の各状態が―読み取りがたい“潜在的”とされる競り合いの諸局面を含め―「同時に共存している」とみる。

■循環過程にあるマクロ/ミクロコスモスにおいて

・《マンダラ》とする《聖地》に《衆生》の所在を見出した人々は，巨視的には《宇宙》を，微視的には《人体》をあて，各《生成・消滅過程/周期（サイクル）》や，その《パラレル》性を読み解いた。

・《迅速で効果的な利他/衆生救済のため》には《いつでもどこへでも行ける》“瞬間移動（テレポーテーション）”や，厳しい時局では待ち望む状態が《はやく到来するように》，《時間的》“早回し”も企図された。

[2]“私たち”のありよう/個のあり方をめぐって

■抱き続けた“難問”，創り出す思考の枠組み

・人間なる《生命体》は，《いつの時代も，宇宙観と生命観の交差するところに》関心を寄せ，《空間/時間/変化とは》を《別の形で考え続け》，毎次“語るに足る”側面だけを引き出してきた。

・見出された“斬新”な思考法が《世界を再構築してしまう》ほどの《パラダイム》となり得る場合でさえ，当の見方・考え方はひとつの《仮説では》と冷静に評する姿勢も示されていた。

■生・死者の切れ目がないと考えられる私たち

・《生者》だけでなく《いずれは死者として》の《私たち》も，社会の難題に対処すべき“担い手”として見出されている。“民衆本位”のあり方では《いまだ生まれざる者》も含むとされる。

・平和，自由，平等の実現という《理想へ向かっての歩みが死後にまで続く》考えに同調する素振りを見せつつ，“他意”をもって《死者/菩薩》が“操作される”など，他の状態も共存している。

■相反して成り立たない個のあり方の読み解き

・《心の在りかた/人間の種々相》を《十種》に割り振る《体系》では，《段階》のみならず《包摂》を強調。整理用の枠線を取り払う段で，諸状態が同時に重なり合うさまをとらえていた。

・個のあり方で《パラドックス/相容れぬ》状態が《展開し得る可能性/必然性》で《密教が密教のままで説かれ得るかぎり》とは，重ね合わせ状態を多世界解釈的に説く見方と相通ずる。

■指導的な役割を果たす者が身にまとう特定の“量子的自己”

・指導的な役割を果たす者は，《転生/同一視/化身》で《自ら》を企図した“量子的自己”に仕立てる。より“有為”な《転生・系譜》へ《塗り替え》もなされる。いずれも「収縮」描写である。

・聖典の解読でも，《否定され，排除されるべき存在》の取り立て，《中心的存在》の《交代》，《仏身観》による《使い分け》，《幻身》などの言い表し方に，適宜の「収縮」が見て取れる。

[3]人や組織/社会/思想のつながり方について

■切り分けると顕在化するあるつながり方，まだ整理のつかない関係性

・《境界》を引くたび，あらわになる《もつれ》。多世界解釈的には，《境界》を引く前はもとより，《境界》を引いた後でさえも，あり得る無数の重ね合わせ，もつれ合い状態を深慮する。

・《別々に理論化》された《描像》間の整理がつかず，《さらに基本的な理論が存在する可能性》が語られるが，“確かな”整理がなされても，さらに汲み出し得る描像や関係性があるとみる。

■意外な“古層”とのつながり，そして体系や概念の“表層”的な当てはめ，仕分け直し

・《立派な表看板》の“古層”には《異なる教えの土台が隠れ》，《置きかわる》のでなく《出たり入ったりしている》との見立てでは，“表層”に《代替/理想》体系をすえても《幻》に帰す。

・概念枠からの《離脱/ずれ》，他領域を交えた《切り分け》直しの吟味では，《輪郭を定める概念操作/政治に惑わされ》ず，当初は“まれ”と感じても，同時にあり得る状態を汲み上げる。

■“あり得ないわけではない”つながりの探索

・ときに《意図的な誤訳/特殊な解釈/深い意味の読み込み/読み替え》で“着目すべき”つながりや意味合いが提起され，《システム》の《組み替え/転換》が進み，《重層的発展》とされる。

・《捨てるものはちっともない/ぜんぶ活かしきって》とは「収縮」を考えない立場に見えるが，《優/調和融合》とする局面への《入れ替え/切り替え》などで“些細”な状態は消去されている。

・《政僧》ばかりか，複数の“顕著”な私を兼ね備えた―ときに，歴史上の英傑との《重ね合わせ》をも思い描く―《権力者》の《一族》側にあっても，“共鳴”のような関係性が探究されていた。

■パラレルな関係の作り込みや，上書きによる削除・更新

・《普遍的》とされる《関係》を《意識的に受け継ぐ》ほか，名高い先例の《転生》という《平行関係》の作り込みや，“他派”の有力な物語づくりには先手を打って封じ込めもなされた。

・他の体制/《宗教性》を掲げる勢力は，ときに《移し替え/くっつけ直す》など，“新しい”関係を巧妙に“上書き”する技法で，“旧来の陋習”とされる世界観・像の“削除”や“更新”をねらう。

[4] 人や組織/社会/思想の歩み・進め方に関して

■“変化”や“バランスのとれた”とする道筋

・《宇宙観》は《大きく変わってきた》。“確かな”/“確からしい”新《説/論》が現れ，それに針路が見出されると，旧《説/論》はわきに追いやられ，無用のように扱われることさえある。

・何らかの観点から“バランスのとれた”とされる考え方や歩み方が相応の頻度で見出されることはあろうが，善し悪しはともかく，“困惑する”ある状態が具合よく消え去ることはない。

■“肝要な”とする路線，“憂うべき”とした窮途

・人類は《世界を破壊》しかねず，《集団的行為》の再考・《再生》が緊要で，《近代の自然科学》をもとに教説を《批判的に継承/解体して新たな可能性を模索》する路線が提起されてきた。

・多世界解釈的な思考もいわば《否定の論法は鋭くても，積極的，肯定的なものが提示できない》《過渡的な思想》だが，一時衰退・消滅とされても，取り得る経路をすべて同時に歩むとみる。

■“常道”からはずれ，理路の付け替え

・“時代感覚に合わない”対象を，《常道》からはずれ，根源的に探ってみるなり，“本来”の《位置づけ》を確認し直し，今日的な《可能性》を討議し得る理路への付け替えがなされていた。

・新路を切り開くには《誤読》を通じた思いがけない状態への気づき/《創発》が肝要とされる。「同時に共存している無数の状態」は《形態》にかぎらず，例示した「多経路」なども含む。

■“無上”なる一到達点，今後考えられる一道筋

・《当時としては最高》の“新領域”研究が，時を経て《陳腐》になっても《貴重な示唆》に富む。“確立された”路線でも“新”路線でも，見出されていない道筋を“汲み出し”続けることが肝要。
・“ポスト・インド後期密教”を《権力の手段》に，その《儀礼》を《潜在的な武器》にとする勢力が，先端科学技術を取り込んだ理論化を進め，《無上》に比肩する語で飾ることも一時あろう。
・《無上/最終段階/総決算》やそれらに類する語が掲げられても，多世界解釈的には，なおもその特定の理路だけではなく，あり得る他の路線との「量子ウォーク」を力説することになる。

次いで，コペンハーゲン解釈的な眼差しでの《意図的な読み替え》で，“ポスト・インド後期密教”として巧みに扱われ得る“新語”を，少しばかり“例示的”に推しはかってみる―すなわち，“これぞという注視すべき教説・実践”をもれなく“言い当て/並べ立て”，それについて自説を展開するわけではない―。各“新語”の内容や意味が明確にされずとも，いかにもそれらしい言説を装い始めたなら，社会全般を下支えする《世界観/思想》になり得る。

あわせて，ことに都市/社会の“スマート化”をめぐって提起され得る，いかにもそれっぽい“新語”も同様に推しはかり，手短に記しておきたい。

■“ポスト・インド後期密教”に相当するとして語られ得る“量子（クァンタム）密教”などの“新語”

《近代の自然科学》や先進技術をベースに，たとえば当世“最高峰”とされる“量子密教”，“量子曼荼羅”を掲げる教説が案出されたなら，それらを“マルクス/共産主義”の観点からさらに“洗練”したという――一見“科学的”ではあるが，論理的には“あり得ない”，実質的にはまさに“骨抜き”の―“量子社会主義密教”（略称：量子密教），“量子社会主義曼荼羅”（略称：量子曼荼羅）なる語が慌ただしく仕立てられ，旧《説/論》の“後進性”が喧伝されることも想像に難くない。

いや，むしろ“順序は逆”で，戦略的になされるそうした概念操作を看過できないとする“本来とされる側に立つ人や組織”が，“変造”された意味・内容などの吟味をにわかに迫られるにいたったとの事態が詳察されるかもしれない。その場合には，インパクトのある“別解義”の提唱は，“先手を打たれ，封じ込められる”ことも考えられる。

■都市/社会の“スマート化”に関して仕立て上げられ得る“量子（クァンタム）レーニン主義”などの“新語”

“デジタル・レーニン主義”[14]をさらに“格上げ”したとする“クァンタム・レーニン主義”なる語で，都市/社会のマネジメントを飛躍的に“スマート化”するような描像が提示されるかもしれない。また，たとえば「一帯一路」に関わる構想についても，同様に，“デジタル・シルクロード”から“クァンタム・シルクロード”へと《読み替え》，上述の略称“量子密教/曼荼羅”―そうした観点に立ったとする量子科学技術―も有力な手段として組み入れて，より“高次”とする諸政策が展開されることも想定される。

このような“新語”に導かれるかたちで，かりに《理想へ向かっての歩みが死後にまで続く》と説かれるならば，それは《衆生救済のため》に《自ら》を企図した通りの“量子的自己”に仕立て上げたとする“最高”指導者があらかじめ設定した“理想”状態への弛まぬ歩みとされよう。また，“共同富裕”などの標語にそって，何を《否定され，排除されるべき存在》の取り立てとするかも“選定済み”で，局面に応じて，適宜の“公益”なる活動は《切り分け》直されていくとみられる。

それでは最後に，これまでの考察を踏まえ，〈多世界解釈的に考え進める「量子都市ガバナンス」〉の記述については，「多居場所/多アイデンティティ/多連係/多理路/多路線/多経路解釈」（谷村 2023, 24–26）にさらに補筆するかたちで，“ひとまず”の試論としたい。

多居（場）所/多アイデンティティ/多連係/多理路/多路線/多経路解釈

■古典論的な実在をこえた「実在」をもとに

この「多居（場）所（個がくらす/身を置く地点）/多アイデンティティ（人や組織/都市/社会の個のあり方/“私たち”のありよう）/多連係（人や組織/都市/社会/思想のつながり方[“共鳴”構造]）/多理路/多路線/多経路（人や組織/都市/社会/思想の歩み・進め方[量子ウォーク]）解釈」においては，量子力学的に共存している複数の状態の“全体”を，多世界解釈が説き明かすような—古典論的な実在をこえた—「実在」と考える。なお，見出しの“/”は“and/or”（および/または）の意で用いている。何かの観察がなされた際に，“観察者”が論じるであろうありようを例示しているが，コペンハーゲン解釈流に着眼点だけを掲げておきたいのではなく，これらにとどまらず，知り得ていないがいくつものあり得る多○○/多□□/多△△解釈…とも量子的な重ね合わせ，もつれ合いにあるとみる。

■“対象”なるもの，そして，その“全体”には

“社会科学”とされる分野において，その“対象”は，物理学でよく図解される電子の観測のごとく普遍的に「それ」と論及できるあり方ではなく，“それ”なるものが，すでに量子力学的にさまざまな自己・他者や，もの・こととも重ね合わせ，もつれ合い状態にあるとみておかなければならない。“対象”の設定とは，そのこと自体，コペンハーゲン解釈的に収縮させた一状態化であることに留意したい。また，そうした“対象”は，同時に，観察の“主体”ということもあり得る。

この“対象”なるものの“全体”には，“現代用語”ではとらえがたく“死語・廃語”にもあたって探究される状態，あえて“普通”とは異なる/“間違った”読み込み/読み替えを糸口に推論を交えて行きいたったとされる様態，事前に覆い隠すなり，切り捨てる/切り分け直すなり，あることを問われないようにするための“擬装・偽装”/もっともらしい“問題”提起，事実にもとづかず都合よく仕立て上げられた“つくりごと（捏造・虚構）”，さらには，人智の及ばないところを埋め合わすような働きをなす“聖なる/無上なる”もの/境地/仕組みなどが含まれることがある。

■どの状態が選ばれるかは共存度によるが

そうした“対象”なるものについて，調査時に，どの状態の“観察者”になるかは，各状態の共存の程度に関係することになる。ただ，政策的/制度的/批評的な観点などから，“観察者”がここぞと操作的に“収縮”させた“しかるべき状態”ばかりの論及にふれていると，それですべてが汲み尽くされ/語られたかのように思い込まされ—いかなる見解/主義/世界観も，ひとつの“かりに立てられた/切り分けられた説”ではないかと，“あり得る無数の重ね合わせ/もつれ合い”状態から主体的に思考し，行動するといったことが容易でなくなり—，他のあり得る状態が「実在」しながらも，“不可視化”されることがある。

■特定の“アクター”として仕立てられるなかで

“より良い社会・経済”などに向けて，人々は—ことによると，“転生した者”/いずれは死者などとしても—その都度，コペンハーゲン解釈的な「収縮」のごとく何らかの役割の担い手として見出され，促される。その整えるべき個のありようには，持ち合うべき視線，つながり，果たすべき務めが絡み合う。ややもすれば，“当

人”が気づくこともなく―“もはやどうにもしようがない”死後にあっても―，何らかの意味で役立つ“エージェント”への“内密（ステルス）”/“深謀”［深く考えをめぐらせて立てたはかりごと］「収縮」という操作がなされている/しまうこともある。

説明責任や透明性を重んじ，民主的な手立てで語られる課題と解決法においても，コペンハーゲン解釈的な「収縮」によると見受けられるならば，論じ合い，選び取られたとされる状態についてのみならず，その他のありようへの思索を止めない。この多世界解釈的な思惟では，「現実」の“全体”像を見渡してみれば，着目/唱道/協議/熟議された状態のみならず，可能な状態のすべてが「実際に存在している」とみる。

■〈一〉を方便として“割る”―あるいは“切り分ける”―にしても

ときに，“目指すべき”とされる一状態が“みずから”に不都合な“観察者”は，“代わり”となるもうひとつの状態を掲げたり，概念自体を回避できないなら利点を見込める二局面に都合よく割り―あるいは切り分け―（その時々に応じてやり直し），それらを工夫して使い分ける/分け合うことがある。そうした思考法にそって，かりに多世界なる〈一〉を方便として“割る”―ないしは“切り分ける”―にしても，“割り方”―“切り分け方”―は提起されたものにかぎらず，他にも数多のやりようがあり得る。もっともらしい輪郭/枠組みでの術/施策や代案/対抗策を見せつけられても，多世界解釈的に読み解くと，コペンハーゲン解釈流に何かを際立たせるにも別様があり得ることを思い起こせよう。

■“私自身”を観察する場合にあっても

“当人”が“みずから”を観察する場合にも，「周囲との相互作用」によって，“しかるべき”あり方を含め，ある状態が一段と意識されるかもしれない―“ことのほか”，あるいは，“それなり”といった具合に―。いずれにしても，それぞれの“観察者”は，概して自分が唯一の存在だと思っているので，その個人に可能なさまざまな状態のなかからその結果が見えたのは往々にして偶然のように思ってしまう。その時々に感じ取ってきた“主たる”（収縮）状態を，いわば“どっちつかず”に―いずれとも定まらずに―生き，また“無意味なもの”については切り離し，あたかも見ないでいられるかのように考えてしまう。

ときに，何らかの尺度をもとに選び出されたいくつかの“典型的”とする（収縮）状態”は，“段階的”として巧みに配列され，さらにはそれらの“包摂”性が説かれることもある。

なお“指導的な役割を果たす”とされる者にあっては，その高次なる状態を満たしたとするため，“先覚”との“同一視”などによる“量子的自己”の作り込み/受け継ぎ/仕立て直しが玄妙になされる―“他派”にはあらかじめその策を封じる―こともある。

もっとも，この多世界解釈的な思惟では，「状態の収縮」は一切考えず，明示・論及されない他の状態も相変わらず共存しているとみる。

■スタンスとして語られる一状態

ある状態が，“実体”としてのみならず，“相応しい”―“観察者”の立場によっては否定/排除すべき“ノイズ”や“屑”同然―とする，何らかの倫理・価値観や世界観に根ざした“スタンス”としての意で主張されても，あるいは“両立しがたい”状態の組み合わせだけをもって“不合理”/“矛盾”などと取り上げられても，それらのみならず，その他の状態も絶えず共存していると思考する。

コペンハーゲン解釈的な思考での「収縮」というメカニズム自体の作動に付随するスタンスが観察されることもあるが，しからば同じく見出された特定のあり方のみならず，その他のありようとの量子的な重ね合わせ状態を推考することもできよう。

なお，“これこそ拾い上げよ”と提起される“際立った状態”を汲み上げ続け，調整をおこたら

ないための仕組みは有用だが，その都度の括りは「収縮」という“無用な原理”に根ざしたコペンハーゲン解釈的な見解とならざるを得ないことに十分留意する。ひとつには，多世界解釈的な思考から改めてとらえ直す作業が欠かせない。

■変化や多元とされる状態の説き示しについて

たとえ巧みに取捨選択・再選択され，排列ないし配置された諸状態をもとに，“循環”，“周期（サイクル）”，“パラダイム転換”，“転回”，“変態（メタモルフォーゼ）”，“発展段階説”，“包摂”，“多元描写”，“交差性”などが展開/再編/上書きされたとしても，そこに提起されていない無数の状態，歩み・進め方との共存を同様に深慮する。

そうした「収縮」による絵解き戦は，いずれも“もっともらしい”―“観察者”の見方によっては暫定的な“それっぽい”――状態の提示にすぎないが，いかなるからくり，操作のもとになされたかを探り続けることは，多世界解釈的にあり得る無数の重ね合わせ，もつれ合い状態を汲み出す際の取りかかりとなろう。

多世界解釈的な思考においては，特定の理路なりを“これこそ”と提示できず，あくまでも例示的になるが，“確かな”整理がなされたとされる理論・領域にあっても“別様”の推論を自在にめぐらし，かりの見解をいつでも提起できる場を大切に整え合う―量子的に重ね合わせ，もつれ合いになっている諸状態から“ある頻度”でそうした開かれたありようをともに見出せる―ことが，ひとつの鍵となる状態であろう。さすれば，“量子コヒーレント状態”のままで考え進め，論じ合うには，“基本的人権”などの共存の程度も関わろう。

今後，コペンハーゲン解釈的な眼差しから，“これこそ画期的/有用”などとして，さまざまな量子ガバナンス論―さらに都市マネジメントに特化した量子都市ガバナンス論―が案出されるであろうが，他分野の論考をも踏まえながら，さらに思考のありようを絶えず探り，練り続けることが肝要であろう。ことに多世界解釈的な見地からとなれば，論理的に完成にいたるということはなく，つねに「工事中」といったことだけでなく，すでに絵解きができていたと思われていたことも，別様にも解説し得ることを踏まえ，絶えず補筆し続けることになろう。

“都市”にかぎらず，概して“社会”なるものにあっては，“時代”が変わり，その“変化”にともない“新たな問題”が途切れることなく生じるように見える。しかしながら，ある意味では，その都度何を“問題”とし，“対処/解決”とするかが変わってきたとも見て取れよう。一連の研究を通じ，それ（だけ）が“問題”ではないのに主たる政策課題のように取り上げられたり，従前の“問題”が“解決”したわけでもないのにもはや問う意味がなくなったかのように扱われたりする事例も概観してきた。ある状態が“問題視”され，何らかの手立てで，“整備”，“改善”，“改革”，あるいは，“変革”とされる“計画/事業”を成し遂げる作法―いずれも，“解”とする一局面を周到に選び取るという規範―は，確かに力強いものではあるけれども，ある状態に偏重した“コペンハーゲン解釈的な眼差し”に強く根ざしているように見受けられる。

この小論は，ことに量子力学の視座を糸口に考察を進めているため，いずれ後世の方々からは見るからに“陳腐”とされるであろう。浅学非才をかえりみず，“当世”なる場を借り，試みに記した“一案”であるが，自由闊達な討議ができる環境を保持する上でも，このような作業に関心を寄せてくださる諸氏にとって，ひとつの“たたき台”となれば幸いである。

■注

(1)　この「多居場所/多アイデンティティ/多連係/多理路/多路線/多経路解釈」については，谷村光浩

(2023)の最終セクション「4. 多世界解釈に根ざした〈考えられる「量子都市ガバナンス」の記述〉」の後半部分(24–26)を参照[https://wwwbiz.meijo-u.ac.jp/SEBM/ronso/no24_3/03_TANIMURA.pdf]。

(2) 語り手の野村泰紀は,「相対性理論から導き出された無限の宇宙は,確率的に存在する量子の宇宙をつなぎ合わせて,1枚の絵にしたもの」と説き,そうした「従来のマルチバースは古典的な描像」と強調する(野村・古田 2018, 74, 82)。

(3) A. ソーカル & J. ブリクモン(2000)は,その「エピローグ」において,「“ポストモダニズム”,“ポスト構造主義”等々の相違は何かといった用語の問題には立ち入りたくない」(243)との姿勢を注記した上で,「われわれが扱いたいのは人文系と社会科学に強い影響を与えたポストモダニズムの一部の知的な側面だけ」(242–243)と強調する。そして,次のような「知的混乱」状態や「極端な型」を例示している(243)。

・曖昧な言説で人を幻惑すること
・現代科学への懐疑的傾向と結びついた認識的相対主義
・正しいか誤っているかを問わない主観的な信念への過剰な関心
・議論しているはずの事実よりも言説や言語を重んじる(あるいは,よりひどい場合には,事実が存在するとか事実について語ることができるという考えそのものを拒否する)傾向

(4) 立川武蔵(2019)は,「すべてのものは空である」—「自性(恒常不変の実体)を伴うものとしては存在しない」—(179)と説いた大乗仏教の理論的な開拓者「龍樹(ナーガールジュナ,紀元150–250頃)」の観点につき,「否定することによって新しい世界が開けてくる,あるいは否定によってよみがえるものがあると考えたのである」(180)と解説を加える。そして,そうした「“生滅とよみがえり”は.....幾度も繰り返され.....聖性のより強い境地に進んでいく」(185)作業であることを「空の実践のサイクル」(184)として提示している。

(5) 末木文美士(2019, 308, 318)は,この「立憲主義」につき,中島岳志が『保守と立憲』に関して提起した「国民や政府は過去の死者たちの営為の所産である憲法を通じて,死者たちによる制約を受ける」との視座を引いている。また,『死者と霊性』(末木文美士編 2021)にあっては,その「座談会」(第III部)にて中島岳志が問いかけた,「立憲主義は死者たちの民主主義でもある。死者たちとともに何かを選んでいく。そして死者たちと対話しながら決定をしていく,そういう方法ではないのか」(124)との見解が収録されている。

(6) 松長有慶(2018)は,こうした密教の考え方につき,随時「価値の劣るものを惜しげもなく捨て去ることによって,科学技術文明を驚異的に発展させた」いわゆる近代思潮とは「まったく逆の方向をとる」(49)と対比してみせ,観察・システム構築者側に求められるとする要点を,次のようにも説き示す(49)。

> 見る側が固定的な基準で一方的に判断を下すことなく,複数のものさしを準備し,一方では劣とみなされようと,他のものさしを幾度か当てることで,優の面を拾い上げる。その優の性格を評価し,それを組織に組み込むことによって,ひとつのシステムを作り上げる。
>
> 密教では何者も排除することなく,それぞれの個性の特徴を評価し,それを生かしきる秘密の眼をもつことが要請されるのである。

(7) 松長有慶(2022)は,この「読み替え」に関しては,その論考に添え,次のような留意点も明示している(115)。

> 空海の読み替えについては,古くから問題視されてきた。文書の写し間違いとか,空海の語学能力にまで疑念が及んだこともある。確かに合理的な判断基準からすれば,読み替えに関しては,不合理で通常の認識能力を超えた表現や記述も少なくない。その中には長年にわたり,繰り返されてきた書写の過程で誤写された例もあろう。
>
> だが空海の撰述書の場合には,一見不合理な記述に見えても,その中に空海独特の見解が挿入されている場合もないわけではない。空海の場合,不合理な解釈の中に,密教眼からなされた真実の読み取り,ないし解釈が含まれている事例も存在するという事実を踏まえて,慎重に検討せねばならないことも心得ておく必要があろう。

(8) 松長有慶(2018)は,空海が提示した「深秘釈」にあって広く知られている著述に,『般若心経秘鍵』

『秘密曼荼羅十住心論』（略名『十住心論』）などをあげる（50）。ことに『十住心論』が説く「九顕十密」については，「あらゆるものを一定の秩序のもとに組織化した上で，それぞれが独自にもつ特性を評価し，最終的にはそれらことごとくを，残りなく包摂してしまう最も密教らしい思想の一つ」（53）と述べている。

⑼ 阿部龍一（2018）は，この力学を，次のように解説する（112）。

> 儒教の天子―徳治論によれば，大災害が起こるたびに王はその不徳を糾弾され，災害が終息を見なければ，天子としての正当性を失い，政権が不安定になる。しかし空海の君主論では，王は真摯に自省して仏事を主催するが，実際に災害を止めるための灌頂，読経，護摩などの仏教儀礼を王宮で行うのは僧尼だった。災害が終わらなければ，責めをおうのは僧であり，王の正当性がいちいち疑われるという事態が回避できる。

そして，旱魃時に降雨を祈祷する修法など，「災害を回避させる儀礼をおこなう密教僧が，儀礼スペシャリストとしてもてはやされた」（112）内実として推しはかっている。

⑽ 阿部龍一（2018）は，まずは「王は輪王という特権的存在であっても，あくまで在家者」と位置づけられ，「王の役割は……僧団と寺院に庇護を与えること」（112）とされたと説く。次いで，「出家者」はみずからを「在家者」と仕分け，「俗世の利害が絡む政治などに僧が介入することは許されない」なか，現に「平安時代には朝廷での仏事が急増したにもかかわらず，政僧の出現がなかった」（112–113）と振り返る。

⑾ 森雅秀（2011）は，『チベットの仏教美術とマンダラ』にて「チベット史の視点と枠組み」を概説する際には，「時代区分」「宗派」「氏族教団」に加え，「説法師と施主の関係」を肝要な着眼点にあげ，次のように論じている（10）。

> 歴史的に見て，チベット仏教にとって最も大きな支持基盤は，チベット内部の氏族ではなく，隣国のモンゴルや中国であった。チベットではこのような国家レベルの依存関係も，仏教的な文脈で理解し，チベットが「法を説く者」（チュー），中国やモンゴルを，その法を聞き，功徳にあずかる施主（ユン）ととらえた。施主とは，その功徳の見返りに，経済的支援を行うものを意味する。……
>
> 清の時代，チベットは政治的には清に従属するような立場に次第に置かれていったが，その支配はゆるやかなもので……「高度な自治」は確保されていた。これは，清の皇帝にとって，ダライラマやチベットそのものが「説法師」であったためである。しかし，そのような信仰をともなわない現在の中国にとって，……両者の関係は支配・被支配という一元的なものにしかならない。現在のチベットと中国の不幸な関係は，チベット仏教に精神的な価値を見いだせない，すなわち「説法師と施主の関係」を築けないことによるのであろう。

⑿ 別所裕介（2021）は，論考の「はじめに」において，「“環境主義”（Environmentalism）とは，生態環境の課題を，政治・経済・社会の問題を考える上での前提とする態度」（144）と説く。もっとも，「元来党中枢にとって国家統合と環境保全を天秤にかけることは本末転倒」とのスタンスからして，その「環境主義自体の限界」（171）を見据える。

⒀ この語については，D. ゾーハー（1991）の『クォンタム・セルフ』，ならびに，その要点を取りまとめている谷村光浩（2012, 63–64）の「4–3. 量子的な“私”」を参照。

⒁ この語については，矢吹晋（2018）の『中国の夢』（第3章 現実化するデジタル・レーニン主義），ならびに，その見地を概観した谷村光浩（2023, 15–16）の「3–2. “デジタル・レーニン主義”なる視座を踏まえて」を参照。

■参考文献

阿部龍一 2018,「空海のテクストを再構築する」,『現代思想』, Vol. 46 No. 16, pp. 98–116, 東京, 青土社.

ベッカー, アダム 2023,「創発する時空」, 日経サイエンス編集部編『ホログラフィック宇宙』, 別冊日経サイエンス 264, pp. 72–79, 東京, 日経サイエンス.

別所裕介 2021,「“生態文化”をめぐる政治と宗教」, 長谷千代子他編『宗教性の人類学』, pp. 144–173, 京都, 法藏館.

ブルース，コリン(和田純夫訳)2008,『量子力学の解釈問題』，東京，講談社.
カプラ，フリッチョフ(吉福伸逸他訳)1979,『タオ自然学』，東京，工作舎.
程雅琴・谷村光浩 2013,「徽州商人のくらしが考究される視座，そして“考えられるガバナンス”の記述」,『名城論叢』，Vol. 13 No. 4，pp. 93–113，名古屋，名城大学経済・経営学会.
千葉雅也 2022,『現代思想入門』，東京，講談社.
千葉雅也・山口尚 2022,「偶然性と多元性」,『現代思想』，Vol. 50 No. 10，pp. 8–18，東京，青土社.
デブレクシニー，カール(森雅秀訳)2022,「チベット仏教における芸術と政治」，宮崎法子・森雅秀編『アジア仏教美術論集 東アジアⅤ 元・明・清』，pp. 519–568，東京，中央公論美術出版.
ダンバー，ロビン(小田哲訳)2023,『宗教の起源』，東京，白揚社.
Farra, Fadi(in Collaboration with Christopher Pissarides)2023, *Quantum Governance*, Leeds, Emerald Publishing.
平岡宏一 2005,「幻身」，立川武蔵・頼富本宏編『チベット密教』[新装版], pp. 78–91，東京，春秋社.
細谷曉夫・古田彩 2023,「“時空の創発”ってどういうこと?: 細谷曉夫氏に聞く」，日経サイエンス編集部編『ホログラフィック宇宙』，別冊日経サイエンス 264，pp. 80–85，東京，日経サイエンス.
市川裕・島薗進 1992,「はしがき」，脇本平也・柳川啓一編『現代宗教学 2 宗教思想と言葉』，pp. v–ix，東京，東京大学出版会.
井上忠・伊東俊太郎 1984,「ニューサイエンスのパラダイム」,『現代思想』，Vol. 12 No. 1，pp. 120–143，東京，青土社.
キンナ，ルース(米山裕子訳)2020,『アナキズムの歴史』，東京，河出書房新社.
町田茂 1994,『量子力学の反乱』，東京，学習研究社.
松井哲也 2022,「AIで哲学する/AIと哲学する」,『現代思想』，Vol. 50 No. 10，pp. 174–182，東京，青土社.
松本高志 1992,「空海の解釈のために」，脇本平也・柳川啓一編『現代宗教学 2 宗教思想と言葉』，pp. 115–135，東京，東京大学出版会.
松長有慶 1982,「密教の源流」，上山春平他『密教の世界』，pp. 5–38，大阪，大阪書籍.
松長有慶 2018,『訳註 般若心経秘鍵』，東京，春秋社.
松長有慶 2021a,「忿怒の仏が放つ宇宙エネルギー」，松長有慶編『インド後期密教〔上〕』[新装版]，pp. 3–12，東京，春秋社.
松長有慶 2021b,「『秘密集会タントラ』欲を生かし育てる」，松長有慶編『インド後期密教〔上〕』[新装版]，pp. 37–81，東京，春秋社.
松長有慶 2021c,「人間の生命力と宇宙エネルギーの共鳴」，松長有慶編『インド後期密教〔下〕』[新装版]，pp. 3–12，東京，春秋社.
松長有慶 2022,『空海』，東京，岩波書店.
松長有慶編 2021a,『インド後期密教〔上〕』[新装版]，東京，春秋社.
松長有慶編 2021b,『インド後期密教〔下〕』[新装版]，東京，春秋社.
松尾太郎 2023,『宇宙から考えてみる「生命とは何か?」入門』，東京，河出書房新社.
宮坂宥勝 1994,『密教世界の構造』，東京，筑摩書房.
森雅秀 2011,『チベットの仏教美術とマンダラ』，名古屋，名古屋大学出版会.
森雅秀 2022,「総論 元・明・清のチベット美術」，宮崎法子・森雅秀編『アジア仏教美術論集 東アジアⅤ 元・明・清』，pp. 27–66，東京，中央公論美術出版.
長谷千代子 2021a,「はじめに」，長谷千代子他編『宗教性の人類学』，pp. 1–2，京都，法藏館.
長谷千代子 2021b,「今，宗教をめぐる何が問題なのか」，長谷千代子他編『宗教性の人類学』，pp. 7–30，京都，法藏館.
長谷千代子他編 2021,『宗教性の人類学』，京都，法藏館.
日経サイエンス編集部編 2018,『量子宇宙』，別冊日経サイエンス 229，東京，日経サイエンス.
日経サイエンス編集部編 2023,『ホログラフィック宇宙』，別冊日経サイエンス 264，東京，日経サイエンス.
野村泰紀 2018,「マルチバースと多世界」，日経サイエンス編集部編『量子宇宙』，別冊日経サイエンス 229，pp. 64–73，東京，日経サイエンス.
野村泰紀・古田彩 2018,「提唱者野村泰紀博士に聞く: 今なぜマルチバースか」，日経サイエンス編集部編『量子宇宙』，別冊日経サイエンス 229，pp. 74–82，東京，日経サイエンス.

岡本亮輔 2023,「考えるな，感じろ」,『現代思想』, Vol. 51 No. 12, pp. 54–63, 東京，青土社.
奥井智之 2021,『宗教社会学』, 東京，東京大学出版会.
佐藤文隆 2024,『量子力学の 100 年』, 東京，青土社.
ソーカル，アラン & ジャン・ブリクモン（田崎晴明他訳）2000,『「知」の欺瞞』, 東京，岩波書店.
末木文美士 2006,『思想としての仏教入門』, 東京，トランスビュー.
末木文美士 2019,『いま日本から興す哲学』, 東京，ぷねうま舎.
末木文美士編 2021,『死者と霊性』, 東京，岩波書店.
立川武蔵 2019,『仏教原論』, 東京，角川書店.
田中公明 1994,『超密教 時輪タントラ』, 大阪，東方出版.
田中公明 2021,「『カーラチャクラ・タントラ』インド仏教の総決算」, 松長有慶編『インド後期密教〔下〕』［新装版］, pp. 173–220, 東京，春秋社.
Tanimura, Mitsuhiro 2005, “Development and Urban Futures,” *The Journal of Social Science*, No. 54, pp. 49–72, Tokyo, International Christian University.
Tanimura, Mitsuhiro 2006, “Beyond UN-Habitat’s Classic Framework in Urban Development Strategies,” *The Journal of Social Science*, No. 57, pp. 275–304, Tokyo, International Christian University.
谷村光浩 2009,「物理学からの類推より“考えられるガバナンス”の記述」,『名城論叢』, Vol. 9 No. 4, pp. 51–66, 名古屋，名城大学経済・経営学会.
谷村光浩 2012,「移動する人々をめぐる論考からの類推より考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」,『名城論叢』, Vol. 12 No. 4, pp. 49–70, 名古屋，名城大学経済・経営学会.
谷村光浩 2018,「多世界解釈からの類推より考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」,『名城論叢』, Vol. 18 No. 4, pp. 1–19, 名古屋，名城大学経済・経営学会.
谷村光浩 2020,「“都市”をめぐる論考の多世界解釈的な再読を通じて練る 考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」,『名城論叢』, Vol. 21 No. 1・2, pp. 1–27, 名古屋，名城大学経済・経営学会.
谷村光浩 2023,「多世界解釈的に考え進める“量子都市ガバナンス”」,『名城論叢』, Vol. 24 No. 3, pp. 1–31, 名古屋，名城大学経済・経営学会.
都築卓司 2002,『新装版 不確定性原理』, 東京，講談社.
内田啓一 2010,『後醍醐天皇と密教』, 京都，法藏館.
和田純夫 1997,『20 世紀の自然観革命』, 東京，朝日新聞社.
和田純夫 2022,『量子力学の多世界解釈』, 東京，講談社.
脇本平也 1992,「刊行のことば」, 脇本平也・柳川啓一編『現代宗教学 2 宗教思想と言葉』, pp. i–iv, 東京，東京大学出版会.
渡辺慧 1993,「“ニュー・サイエンス”をどう見るか」, 河合隼雄他編『岩波講座 宗教と科学 別巻 1「宗教と科学」基礎文献 日本篇』, pp. 327–358, 東京，岩波書店.
ウィルバー，ケン編（井上忠他訳）1983,『空像としての世界』, 東京，青土社.
矢吹晋 2018,『中国の夢』, 東京，花伝社.
ゾーハー，ダナー（中島健訳）1991,『クォンタム・セルフ』, 東京，青土社.

Innovating a Paradigm of "Quantum Urban Governance" in Light of the Thought of the Many-Worlds Interpretation: By Deriving Valuable Ideas from Late Indian Esoteric Buddhism-Related Discourses

Mitsuhiro Tanimura

Abstract

By deriving valuable ideas from late Indian Esoteric Buddhism-related discourses, this paper proceeds further with fundamental research for innovating a paradigm of "Quantum Urban Governance" in light of the thought of the Many-Worlds Interpretation. Based on the above-mentioned deliberation, the last section attempts to explore the conceivable description of the "Many-'Habitats'/Identities/Linkages/Processes/Lines/Routes Interpretation."